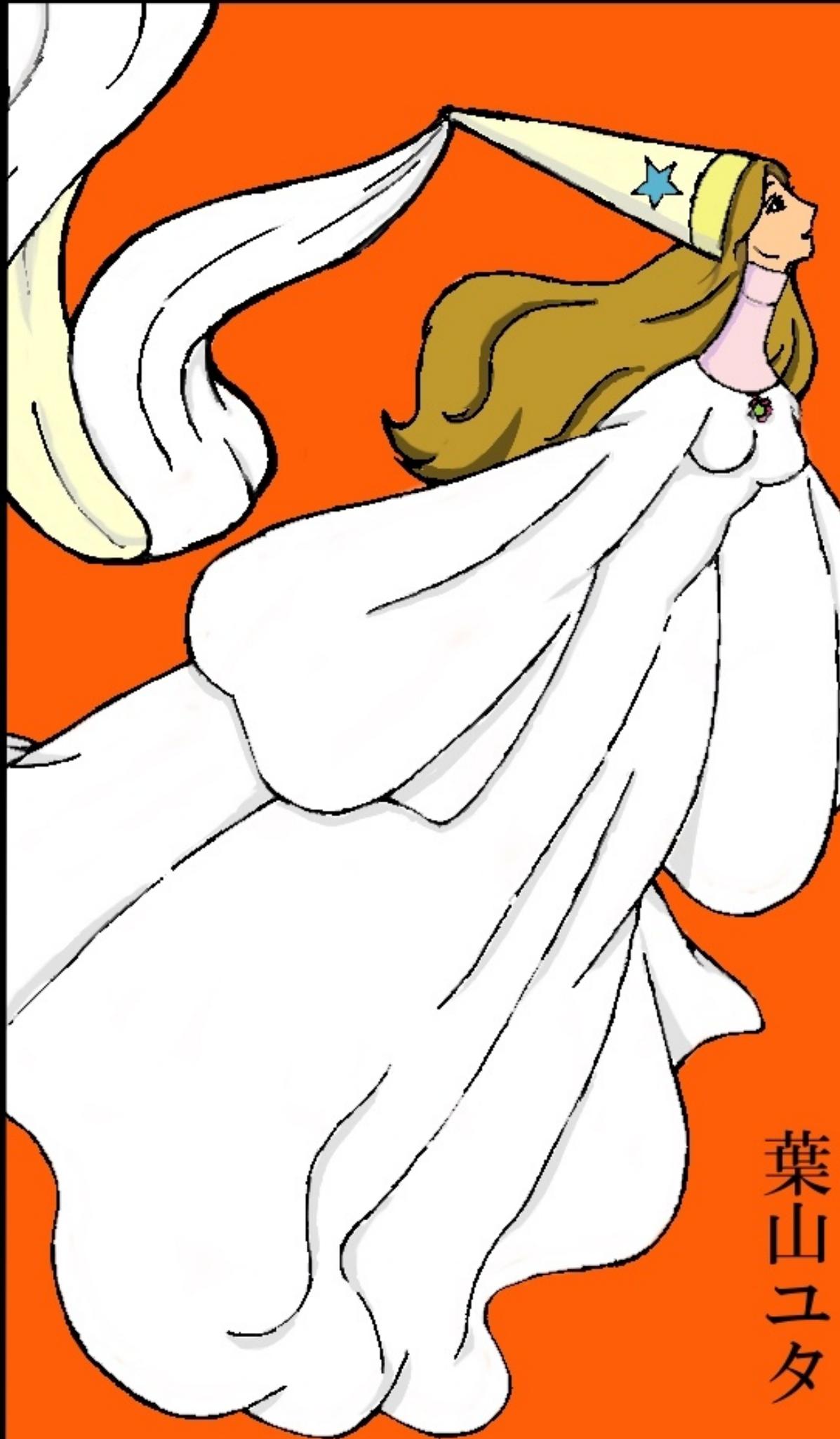


何処にも無い国の物語

葉山ユタ



更新案内

2011年6月13日更新：三話追加

1. 恋の章 第四話 「薫のバカ」
2. 恋の章 第五話 「紅林君の憂鬱」
3. 闇の章 第四話 「霧笛」

2011年7月3日更新：二話追加

1. 雅の章 第五話 「三美人」
2. 獣の章 第四話 「神獣」

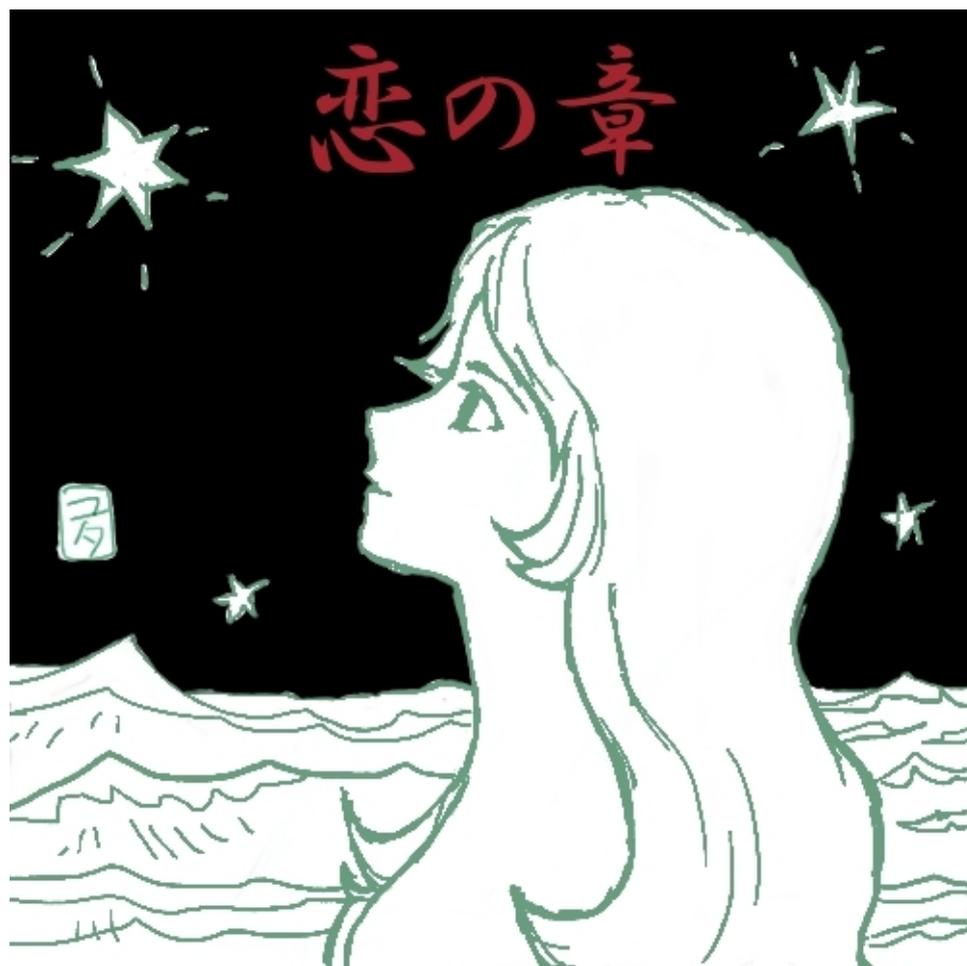
2011年8月22日更新：二話追加

1. 獣の章 第五話 「恨み猫」
2. 闇の章 第五話 「幸福の指環」

2011年10月23日更新：一話追加

1. 時の章 第五話 「虹」

※今回を持って更新を終了し、完成とさせていただきます。



第一話 爪

第二話 火打石

第三話 試金石

第四話 薫のバカ

第五話 紅林君の憂鬱

義姉さんが死んだのは、僕が十五歳の夏だった。

義姉さんは二十一、夫である僕の兄は三十二で、僅か二年の結婚生活が妻の自殺で終わってしまったのだ。

あの夏、僕と両親、若い兄夫婦の五人で、O海岸の別荘へ避暑に出掛けた。

公務で忙しかった父は、二三日を海辺で過ごす、母を伴い家へ帰ったが、駆け出しの作家だった兄とその妻、学生だった僕は、夏中をこの海風の吹き抜ける快適な別荘で、長閑に過ごそうと居残った。

兄夫婦の仲が実際のところどうだったのか僕には分からないが、義姉さんは毎日明るく朗らかに、料理を作ったり海岸を散歩したり、一見幸せそうに見えた。

義姉さんは背が高くほっそりしていて、俯き加減にしていると、とても淋しそうに見えたが、その伏せた目を上げさえすれば、長い睫毛に縁取られた黒目がちの瞳は明るく、ぱっと花が咲いたように艶やかで美しい人だった。

家にいる時は、和服で髪をまとめている事が多かったが、この別荘にいる時は軽くウェーブのかかった髪を肩まで伸ばし、ノースリーブのワンピースを軽やかに着こなしていた。

その方が年相応に若々しく見え、僕は美しい義姉が自慢だった。

この夏の間、一作長編を仕上げたいと張り切っていた兄は、筆がのっている時は書斎に閉じこもり食事と一緒に摂らなかったのも、僕は何となく義姉さんと過ごす事が多かった。

一緒に市場まで買い物に行ったり、海岸を並んで散歩しているうちに、人見知りな話ベタな僕も、段々義姉と本当の姉弟のように気軽に話せるようになった。

ある日の午後、近所の方がスイカを持ってきてくれたので、それを伝えようと義姉を探した。

台所にも庭にもいないので、寝室のある二階に行って、義姉さん、と声を掛けると、案の定寝室から、はあい、と返事があった。ドアが開けっ放しだったので、洋間の寝室を覗くと、義姉は白いワンピースを着て寝台に寝そべり雑誌を読んでいた。

「お隣さんからスイカ頂いたよ」

「あら、そう。冷やしておいてくれたの？」

「うん、台所においてあるから」

「ありがとねえ」

大きな窓の向こうは碧い海と青い空で、それらを背景にした白いワンピースの女は、まるで油絵のモデルのようだった。僕は話しながら目を細めて、その部屋の風景を眺めていた。そのままずっと義姉の姿を眺めていたかったのだ。

義姉は突然何か思いついたように体を起して言った。

「純ちゃん、ちょっとお願いしていい？」

「あ、はい、何ですか？」

僕が遠慮がちに義姉の寝台に近づくと、義姉は少女のようにいたずらっぽく微笑んだ。

「私、最近目が悪くなって、細かい物が見づらいのよ」

「へえ、近眼？」

「そうなのね、きっと。でね、足の爪を切って欲しいの」

「ええ?!足の爪？」

僕は吃驚して大声で訊き返した。女性の足先なんて、触った事は勿論良く見た事すらない。まして他人の爪を切るなんて考えた事もない。

僕の間を抜けた顔を見て義姉さんは可笑しそうに笑った。

「そんなにおかしな事ではないわよ。お母さんは子供の爪を切ってあげるし、私も旦那さんの爪を切ってあげるわ」

「そ、そうだけど…」

義姉さんは、躊躇う僕を寝台に引き寄せて座らせると、ベッドサイドのテーブルの小引き出しから爪切りを取り出した。

「ね、頼むわ」

そう言って僕に爪切りを手渡し、自分が今まで読んでいた雑誌の上に足を乗せて微笑んだ。

僕は覚悟を決め、何でもない風を装って義姉の白くて細い足指を押さえ、おっかなびっくり爪を切り始めた。義姉さんがじっと僕の手元を見つめているのを感じ、緊張で頬が熱くなる。

パチンパチンと爪を切る音だけが静かな室内に響き、その音の意外な大きさが、耳の奥に痛みに似た小さな衝撃となり僕の心を震わせた。数分かけて、僕は一言も口をきかずに十本の爪を切った。

最後の一本の小さな小指の爪を切り終わり、ホッと息をつくとき、階下にある電話のベルが鳴り出した。

「あら、電話。今度、純ちゃんのも切ってあげるね」

そう言うときと寝台から下り、裸足で階段を駆け下りて行った。独り寝室に残された僕は、爪切りを雑誌の上でトントンと叩いて切り落とした爪の屑を集め、ベッドサイドにある屑入れに捨てようと雑誌を持って立ち上がった。

―― 義姉さんは、兄貴の爪を切ってあげるのか…。

そのまま僕は立ち止まってしまった。

その爪を捨てられなかった。

僕は、その爪が欲しくなったのだ。

ズボンのポケットからハンカチを取り出して寝台に広げ、爪を雑誌から移し、素早く畳んでポケットにしまい込んだ。

雑誌と爪切りをテーブルの上に置くと、僕は何食わぬ顔をして寝室を出た。これは、義姉も兄も知らない、僕だけの秘密だ。

その後、数日してから、義姉さんの姿が消えた。

その日、僕は自室で勉強をしていて、兄は義姉さんと海岸へ日光浴に出掛けた。

夏も盛りを過ぎ、砂浜には兄夫婦と、流れてくる海藻を拾う地元の子供らが二三人いるだけだった。

泳げない義姉さんは、その日は珍しく浴衣を着てパラソルを片手に砂浜に座っていたそうだ。

兄が砂浜に寝転んでうたた寝から目覚めた時、自分の頭の所に義姉さんのパラソルが立てかけられていたが、その持ち主はどこにもいなかった。先に帰ったのかと別荘まで戻ってみたものの、やはりいない。

僕らは慌てて警察に電話を掛けたり、近所の人に声を掛けたりしてから、また砂浜まで走った。

警察や消防団などが手分けして探してくれたが見つからず、昆布を拾っていた子供達は、波打ち際を淋しそうに独りで歩く義姉さんを見かけていたが、その後どうしたかは知らないと言った。

その日は結局見つからず、兄と僕は眠れないまま朝を迎え、日の出と共にまた海岸へ向かった。

昼ぐらいになって、小舟に乗って漁に出ていた地元の老人が、岩場に引っかかっていたと女物の浴衣を持ってきてくれたが、それは正に義姉さんが着ていた浴衣で、兄はそれを握りしめたまま声も無く項垂れ、僕もまた濡れた浴衣を見つめたまま、現実味の感じられないこの出来事に呆然としていた。

その後何日経っても義姉さんの体は見つからず、警察は当日の状況から判断して事件性の無い自殺と判断し、捜索を打ち切った。家族はみな、自殺とは限らない、事故か失踪ではないのかと疑っていたが、だからと言って生きているという確証も掴めず、結局兄の今後の事も考えて死亡届を出し、形だけの葬儀を実家で執り行なった。

義姉さんの両親は既に亡く、年老いた祖母がもう一人の孫娘を連れて現れたが、畳に額を擦り付けるようにして、この度は月子がご迷惑をおかけして申し訳ありません、と涙ながらに謝ったのには、両親も兄も慌てて慰めたものだ。

祭壇の前に小さな机を置いて白い布を敷き、海から引き揚げたあの浴衣と義姉の愛用の櫛や香水瓶を置いて、僅かな参列者に故人を偲んで貰う事にした。

「俺はどうしても月子が死んだって気がしないんだよ。死ぬ理由が何にも思いつかないんだ」

祭壇を前に呟く兄の言葉に、僕は何も言ってあげられなかった。

「墓に何を入れろって言うんだよ。何にも無いってのに。なあ純吾、月子は本当は何処かで生きてるんじゃないのかなあ」

兄は真っ直ぐに僕の目を見つめて言った。文士気取りの取り澄ました大人の目ではなく、子供の様に素直な目だった。

僕はズボンのポケットの中に入っている、ハンカチに包まれた爪の欠片を思い出しながら、そうだね、僕も生きている様な気がするよ、と答えた。墓に何も入れる物が無いと聞かされても、やはり爪の事は誰にも言えない。居たたまれず席を立て廊下へ出たところ、参列に来ていた義姉さんの従姉妹が向こうから歩いて来た。僕より一つか二つくらい年上の少女だ。黒いワンピースを着て長い髪をお下げにし、黒いリボンで留めている。義姉さんには似ていない。

「あの、純吾さん」

「はい」

「月子姉さんからあなたの事聞いていたわ。一度会って見たかったの」

「僕の事を？」

「そうよ、陽に焼けてすごく可愛い子だって。美少年だって」

喪服を着て嬉しそうな顔でそんな事を言う彼女に、僕は少し腹を立ててムツとした思う。

「あら、不謹慎だって思ったわね。でも、そんな事ないのよ。だって私、月子姉さんは自殺なんてする人じゃないって分ってるもの」

微笑んでそう言うと、また急に神妙な面持ちになり座敷へと向かって行った。廊下に取り残された僕は、僕の知らない義姉さんの事を聞かされた驚きで、しばらくの間そこに佇んでいた。

葬儀は終わり学校が始まり、いつの間にか四十九日も過ぎた。

日常は変りなく繰り返し、兄も仕事を再開して僕らは義姉さんの不在を当たり前の事として受け止めるようになって行く。元々遊び好きで女に良くもてた兄は、気軽に付き合える相手と適当に遊んでいるようだった。

義姉さんが消えた一年後、初盆を迎えた。

玄関先に迎え火を焚いた時、僕は家族がいなくなるのを見計らって、ずっと大事にとっていた義姉の爪をその炎で焼いた。

白い爪の欠片は炎の中でパチパチと小さな音を立て、焦げ臭い匂いと白い煙になって消えていった。

月子さんは、やっぱり何処かで生きている気がする。

だから、もうこれを持っている必要はないのだ。

月子さんは、もう兄嫁ではない。

だから、僕はもう、これを持っている必要はないのだ。

僕は十六歳になり、去年の夏より十センチ背が伸び、兄と父を追い越していた。

火打石

天使が語った話

人間というものは「火打石」のようなものだ。

そう言って彼は、そのきれいな右手の掌に、一組の火打石を出現させました。

ちなみに、天使である彼は、絵本や教会の絵にあるような、クラシックな服装はしていません。

今日は、ジーンズに厚いフリースのパーカーを着ています。寒いそうです。翼は有ったり無かったりです。実用品ではないので要らないのだけれど、人間がそう期待していれば見えるのだそうです。今は私の眼には見えませんが。

顔立ちはラテン系で浅黒く、チョコレート色の大きな瞳、艶のあるブルネットの巻き毛を短めにカットした、十代後半の可愛らしい青年の姿です。天使だからと言って、金髪碧眼ではないんですね。まあ、この辺も色々だそうですが。

「火打石ってどういう事？」

私の質問に、彼は淡々と答えました。

「石と石をぶつけて、火花を得るだろう？この火の為に君たちは生きているんだ」

「イタイ思いをして、価値あるものを得るって事？」

「ちょっと違う。それは表層の現象を歪めて見ている」

彼は馬鹿にしたようにニヤニヤ笑いました。カンに触りますが、否めません。

彼は両手に石を持って、カチンと打って見せます。

「これが経験だ」

火花と石の粉が散って、焦げ臭い匂いがフワリと鼻先をかすめました。彼がフッと宙空の火花に息を吹きかけると、一瞬小さな炎が燃え上がり、すぐに消えました。

「これが知恵だ」

「…分かりません」

私の言葉に、彼は残念そうに肩をすくめます。外国人らしいボディランゲージです。

「君たちは、経験し、観察し、知恵を得てそれを利用し、考察して進化する。これを繰り返すのが、人間の喜びであり存在理由だ」

説明は分かりましたが、今度はその理由とやらが分かりません。

「何の為にですか？」

彼は、ちょっと寂しそうな横顔を見せたまま、ポツリと言いました。

「僕は、君がいるから人類を好きでいられる」

おやおや、答えをはぐらかされてしまいましたね。

試金石

ようやく雪が雨に変わった夜、誘われて、久しぶりに友達と飲みに行った。

カウンターだけの小さなバー。カクテルが安くて、女性にも優しいお店に二人して飛び込んだ。

あんまり飲んだりしない子なので、何か有ったのかな、と思っていたが、案の定、面倒な恋をしているらしい。

綺麗で聡明、人見知りで簡単に男と付き合う子じゃない。この子が好きと言うのなら、それは誤魔化しの無い本気の恋なのだろう。

でも、相手の気持ちははっきりしないみたいだ。

私は、梅酒ロックをすすりながら、試金石が有ればいいのにねえ、と呟いた。

「試金石？」

彼女は頬杖を付いて、カウンターに置かれた桜色のカクテルを眺めながら聞いた。

「うん、金の質だかを見分ける為に使う石よ。人の気持ちを測る為の、そんな石が有ったら便利よね」

「ああ、なるほどねえ。でも、試金石と言えば試金石かな…」

「なに？そんな物が有るの？」

彼女は、少し首を傾けて、天井から吊るされている小さなライトの方を見ている。

「彼が私の試金石なんだと思う」

「そうなの？」

「そうかも」

そして二人して、ふふふ、と笑った。

「私はやだな、測られるの」

「まあ、そうよね」

静かに笑っている彼女は綺麗で、しなやかな強さを感じる。

試金石の結果が石であれ金であれ、きっと彼女は大丈夫。そう思えた。

「大丈夫だよ」

「うん、大丈夫」

そして又、二人で、ふふふ、と笑った。

薫のバカ

大学の授業が終わり、帰ろうと校門に向かってキャンパスを歩いていると、図書館から出てきた友人の薫とばったり会った。

「お、杏子ちゃん。地下鉄まで一緒に帰る？」

「うん、帰ろ。薫は本、借りてきたの？」

「いや、返してきたとこ。今日は荷物が多いから借りなかった」

薫はボーイッシュな女の子で、少し癖っ気のある黒髪をショートカットにし、華奢な体つきをしている。いつもジーンズ姿で、スカートを穿いているところを見たことが無い。話し方もサバサバしていて、およそ女らしい様子が無い子なのだ。

いまは薄着の季節なので、いくらなんでも男の子に間違われる心配は無いが、これが冬場で厚着をした上に、分厚いマフラーなんぞ首から顎にかけてグルグル巻いていると、度々男の子に間違われるそう。けっこう可愛い顔立ちをしているし、スタイルも悪くないのに勿体無いと友人間では評判だが、本人は自分を「可愛い」と思った事が無いようで、宝の持ち腐れではあるが、多分ずっとこんな調子で行くのだろう。ちなみに性格は真面目で明るく、普段は大変しっかりしていて頼りになるのだが、たまに大ボケをかまして、皆んなを安心させてくれるいい子だ。

そんな薫が、何だか楽しそうな顔をしている。

「何よニヤニヤして。何だか今日は変だよ？何かいい事でもあったの？」

「ふふっ。いい事か～。有ったわ～。くっくっく」

本気で思い出し笑いをする様子に若干引いたが、興味はそそられる。

「何、何？何が有ったのよ。言いなさいよ」

「いや～、今日さあ、学食でラーメンご馳走になっちゃった」

「ラーメン？」

「そう！醤油ラーメン」

「…ったくアンタは、どうしてそう色気の無い…。ま、いいわ。それで、誰に奢ってもらったわけ？」

「うん、それがね…」

薫の話は、こうだった。

今日のお昼過ぎ、学生食堂の片隅の席で、彼女は菓子パン一個という、もの淋しいランチを食べていた。薫は一人暮らしの貧乏学生で、学食で定食を食べることなど滅多になく、大抵は掛蕎麦だの売店で買ったパンなので空腹を満たすような侘しい生活を送っている。

彼女が四人がけのテーブルに一人で座り、お茶と菓子パンを、交互にゆっくりチマチマと食べていると、突然前の席にラーメン丼の乗ったトレイを持った男子学生が座った。

驚いて顔を見ると、それは見知らぬ男の子で、薫はガラガラの学食内を見回し、何で選りによってここに座るのかと不思議に思ったそうだ。

当の男子学生は、薫の顔を見ることも無く、ごく自然な態度で割りばしを割り、ラーメンを食べ始めた。醤油ラーメンの芳醇な香りが鼻孔と食欲を刺激し、薫はかなり悩ましい気持ちになったらしい。

—— こいつ、何でアタシの前でラーメンなんぞ…。

気持ちがトゲトゲしくなり始めた時、彼が突然口を開いた。

「昼メシ、それだけ？」

「う…うん」

邪気の無い言い方に、こっくりと頷いた。

すると、彼はツイと席を立ち配膳カウンターへ向かい、戻って来た時には手に割り箸とレンゲを持っていた。そして、まるで旧知の友人のように、それを薫に手渡し「一緒に食べよう」と言った。

「い、一緒に？え？いいの？」

「うん。ちょっと多かった」

知らない男性と一つの丼からラーメンを食べるという行為に、あんまりと言うか、全く恋愛経験の無い薫としては、躊躇は有ったものの、その男の子のあまりに自然な態度に、これはあれだ、従兄弟か兄弟だと思えばいいのだ、と言う体の良い言い訳を思いついて、その厚意に甘える事にした。

早い話、ラーメンの誘惑に抗えなかったのだ。

「い、頂きます」

パチンと割り箸を割って、遠慮がちに麺を取って口に入れる。

「…んまい…」

コクがあってすっきりした鶏がらベースのスープに、黄色いちぢれ麺が上手くからんでとっても美味しいです。ラーメン通のような賞賛のフレーズが頭の中を流れて行く。

すると、向かいの彼が箸でチャーシューをつまんで、薫の箸先にちょいと置いた。

「食べていいよ」

「あ、ありがとうございます」

薫は箸を手にしたまま深々と頭を下げた。なんて親切な人なんだろう、と感動した。

二人は頭を付き合わせたまま、しばらく黙々と食べていたが、その男子学生は途中で箸を置いて微笑んだ。

「全部食べていいよ」

「え？もう食べないの？」

「うん」

そう言うと彼は、自分の使った割り箸とレンゲを持って席を立ち、配膳カウンターに戻すと、そのまま学食を出て行った。

薫は彼の背中を見つめながら心の中で合掌し、有り難くスープの一滴まで残さず、そのラーメンを頂いたそうだ。

「へーっ？なに、その人、変わってる」

私は突込みどころ満載の薫の話にびっくりした。

「ねえ？でも、有り難いわ、ひと様の親切ってものは」

たかだか学食のラーメンとは言え、見ず知らずの人にご馳走してもらった事が心底嬉しかったらしい。

「いや、アンタ、それ、普通の親切と違うと思うよ」

「そうなの？普通じゃないとすると何？尋常じゃない親切？」

「いや…アンタって賢いのに、ちょっとバカだよな？」

「失礼な。何で私がバカなのよ」

「まあいいわ。で、その人、どんな人だった？」

「えっとねえ…」

顎に細い人差し指を当てて考える。こういう時の彼女の横顔は綺麗だ。

「カッコ良かった」

「えーっ？イケメンなの？」

「そう…」

宙を見つめて顔を思い出しているようだ。そして、私に向き直って言った。

「そうそう！すごくカッコ良かった。背が高くて、目鼻立ちのはっきりしたすごい二枚目だったよ。あんな人、滅多にいないんじゃないかな」

「えーっ！？名前とか聞いてないの？」

「聞いてない」

「あ、アンタって子は、イケメンよりラーメンの方が大事なわけ？」

薫は感心したように腕組みして、あははは、と笑いだした。

「杏子ちゃん、上手いこと言うなあ。そうだね、花より団子だったかなあ」

やっぱり、薫はちょっとバカなんだと思う。

紅林君の憂鬱

紅林は今日、少し憂鬱だった。

珍しく早めに学校に着き、講義室に向かおうと廊下を歩いていたら、突然誰かが彼の名前を叫んで飛びかかってきた。

動きがトロかったので、さっと身をかわして足払いを掛けたら、その男は勢い良く壁に激突して崩折れた。眼鏡のフレームが歪んで、見るも無残な横顔を晒していたが、紅林の知った顔ではない。

「俺に何か用？」

放って置こうかと思ったが、一応殴りかかってきた理由くらいは知りたいので聞いてみた。床に倒れた男は歪んだ眼鏡をかけ直し、涙で滲んだ見苦しい顔で唾を飛ばしながら叫んだ。

「お、俺はリエの友達だ！お前はリエを弄んで捨てただろう！一発殴ってやらないと気が済まないんだよお！」

紅林は、その凜々しい眉をひそめ、日本人離れした大きな美しい瞳で彼を見下ろしながら聞いた。

「リエ？リエってどこのリエ？」

「とぼけるな！原田リエだよ！お前に捨てられたショックで、もう一週間も学校に来てないんだぞ！」

—— 原田リエ…誰だっけ…。

紅林は左手をジーンズのポケットに突っ込み、右手で顎をさすりながら考えた。廊下を歩く女学生達は、紅林の美しい立ち姿と、西洋の青年貴族を彷彿とさせる端正な顔立ちに、うっとりと思われながら通りすぎて行く。背が高く引き締まった体躯を持つ彼は、絵に描いたような美青年だった。

「覚えてない。いや、知らない」

素っ気なく言い放つと、そのまま行ってしまうおとしたので、慌てて眼鏡の男が紅林の背中に向かって罵声を浴びせた。

「てめえ！あっちこっちでツマミ食いしやがって！そのうち誰かに刺されるから覚えておけ、馬鹿野郎！」

その言葉を聞いたとたん紅林は踵を返し、ツカツカとその男の近くまで戻ると、廊下の壁をドカンと思いきり蹴った。

「何だとォ！黙って聞いてりゃ巫山戯たこと抜かしやがって！誰かに刺されるだぁ！？その気があるならテメエが自分で刺しやがれ！」

紅林の怒声が廊下に響き渡り、衆目を集める。もう一度、その男の側の壁を全力で蹴りつけると、眼鏡の男は紅林の迫力に圧倒されて腰が抜け、小さくヒィと呻くと床にへたれこんでブルブル震えだした。

「大体何だテメエは！？その女の男なのか？ええっ！？」

仁王立ちで凄む紅林は、まさに鬼神の如き恐ろしさで、その美しい容貌は猛々しく輝いていた。

「い、いえ…おとこってほどの事は…あの、と、ともだちでして…」

「その女が好きなのかっ!？」

「は、は…、まあ、はい、そうですね…」

「なら、テメエが最後まで面倒みてやれっ!」

「は、はい! スイマセン!」

それを聞くと、紅林はまた何事も無かったように踵を返し、講義室に向かって廊下を歩いて行った。眼鏡の男はぐったりと廊下に横になり、嵐が過ぎ去った事に安堵した。

「あんな顔して、なんて恐ろしい…」

そう、紅林は一見甘ったるい優男だが、その中身は猛烈に男臭い男なのだ。

階段状の大講義室に入って後ろの目立たない席を取り、ドサッと腰掛けると、紅林は椅子の上で仰け反るようぐうっと伸びをした。

—— 畜生、朝から鬱陶しい。何の話だかさっぱり分からねえし、何なんだあのバカは。

怒りでムカムカしたまま、心の中でさっき起こった事を反芻して考えていると、隣の席に誰かが座った。

「おはよう。君が遅刻しないで学校に来るなんて珍しいね」

顔を見ると、紅林の高校時代からの友人だった。紅林とは全く性格も嗜好も異なるが、お互い群れるのが嫌い自由な所がウマが合うのか、付かず離れず友人関係が続けている、数少ない友達の一人だ。

「ふん、早起きは三文の得ってのは嘘だな」

「ふふ、廊下で大喧嘩したんだって？」

「してねえよ。なんもしてねえ。壁、蹴っただけだ。足裏が痛えわ」

どうでも良さそうに答えてから椅子に座り直し、教科書やらノートをカバンから出して、眠そうにその上に突っ伏した。栗色がかった柔らかな髪が、フワッと揺れる。

「女がらみなんだろ? 据え膳食うにしても、ちゃんと選んだらどうだ」

「選んでるよー。後腐れのないのを」

「後腐れしてるだろ? むやみに人の恨みを買うような事は止めて、誰か一人に絞って、真面目に付き合えよ」

「ふん、お前に言われたかねえ」

紅林は腕に顎を乗つけたまま、友人を横目で睨んだ。

睨まれた当人は、その切れ長の瞳をちらりと彼に向けたが、すぐに下の方の窓側の席でキャッキヤしてこちらを見ている二三人の女学生達に視線を移し、少しだけ表情を曇らせた。

「あれ、君の親衛隊だろ? 困ったもんだよな。僕まで変な噂を立てられて迷惑だ」

紅林は腕に顔を埋めて溜息をついた。

「俺だって迷惑だよ！お前と一緒にいるだけでゲイ疑惑ってどういう事よ！？お前はどうか知らんけど、俺は違うだろうよ！」

「僕だって違うよ！それに君の場合はバイ疑惑じゃないのか？」

「どっちだっていいし！どっちでもないし！」

興奮している紅林を尻目に、友人は鼻の先で小さく笑うと、澄まして教科書を広げた。

サラサラの黒髪に白い肌、切れ長の穏やかな瞳を持つ端正な顔立ちの彼は、紅林の対極に行く和の貴公子といった風情であるが、どこも無く人を寄せ付けない冷たい雰囲気をもっているせいか、女の子達が付いて回るといような事は無かった。

「よう、レーイチ。今晚、飲みに行こうぜえ」

「うん？今日はダメだ。僕、この講義終わったら帰らなきゃならない」

「ちえっ、つまんねえなあ…」

その後すぐ講師が入って来て授業が始まり、紅林はボンヤリと考え事をしながら時間を過ごした。

紅林は自分がモテると言う自覚は有る。何せ物心付いた頃から年齢を問わず、周囲の女性にチャホヤされたのだから当然と言えば当然だが、だからと言って、本当に女性に好かれているわけではない事も承知していた。

「好きです」と言われて、ああ、そうかと普段どおりの会話をすると、まず半分くらいの女の子が「思っていた人と違った」と去って行く。結局彼女達は、紅林の外見からイメージする貴公子然とした男性像に憧れていただけで、物言いも荒々しく、武道オタクで酒豪で愛読書が海外のポルノ小説という、彼の本質の一部である男臭さに耐えられなかったらしい。

残った半分の中には「一度だけでいいから〇〇して欲しい」（デート、食事、等）と、積極的な事を言う子もいたが、そんな言葉に乗って痛い思いをした事も一度や二度ではないので、今はもう信じない事にしている。

女の「一度だけでいいから」は男の「なんにもしないから」と同じくらい欺瞞に満ちているのだ！（紅林談）

誘って来る女の中には、頭、大丈夫かと思うような奇矯な子や、紅林の大嫌いなタイプも多く、結局、一人に絞るも何も一人も残らないのがオチだった。そして、紅林自身も誰も好きにならなかったのだから、もうどうしようも無く不毛な経験ばかりなのだ。

―― モテるって、なんかメリット有るのかな？

今まで女がらみで失った、物心両面での諸々を思い出して、紅林は少し憂鬱になった。

やがて講義が終わり、ドアが開いて一斉に学生達が廊下に溢れ出した。紅林は友人の零一に、じゃあなと挨拶すると、次の授業を受けに別の講義室へ向かった。それは語学クラスの小さな教室だったが、行ってみるとドアに張り紙がしてあり、講師が急病のため休講にする、と書いてあった。

「うわぁ…何か今日はツイてないわ…」

次の授業までかなり時間が空いてしまったので、仕方無く時間つぶしの為に紅林は図書館へ行った。静かな図書館の一角に有る日当たりの良いソファに座って雑誌を読んでいるうち、段々気持ちが悪くなってきて、彼はいつの間にかぐっすり寝こんでしまった。

ふっと目が覚めた時、時間はお昼を大分過ぎていた。

―― 腹が減ったな。

今なら学食も空いているだろうと、大きな欠伸を一つしてから立ち上がり、フラフラと図書館を出て、別棟にある学生食堂へと足を向けた。

紅林の家の食事は正統な和食が多く、カレーライスやチャーハンと言った手間のかからない家庭料理が供される事は殆ど無い。家でインスタントラーメンを食べた事が無いと言う事実は、未だに誰にも言えない紅林の恥ずかしい秘密なのだ。その為、学食で一般的なカレーやラーメンなどが、とても魅力的なおやつか何かの様に思え、紅林は学食が大好きだった。今朝から嫌なことが続いたので、何かこってりしたジャンクな物が食べたい気分でもあった。

学食に着いて中を見回すと、思ったとおり席は空いていて、のんびり食事が出来そうだった。

券売機で醤油ラーメンのチケットを買ってカウンターのおばちゃんに渡し、手近な椅子に座って出来上がりを待つ事にした。何処の席に座ろうかと空いているテーブルを物色していると、奥の隅に有る四人がけテーブルに、柔らかそうな髪をショートにした女の子が一人で座っているのが見えた。

―― ああ、なんつったかな、あの子…。

以前、図書館のロビーで彼女に時間を聞いた事がある。

あれは真冬で、紅林は風邪気味でマスクをし、図書館のロビーのソファで休んでいた。誰かを待っていたらしい彼女は黒っぽいウールのコートを着こみ、下はジーンズにワークブーツ。胸から鼻の下まではざっくりしたニットのマフラーで覆われ、紅林はてっきり男の子だと思って声を掛けたのだ。

時間を教えてくれた時、彼女はマフラーを顎の辺りまで下ろしたのだが、その時見えた小さなピンク色の唇を見て、あれっ？と思った。

「君、女の子？」

彼女は、失礼な質問に気分を害した風もなく、真っ直ぐ彼を見て「はい」と一言答えた。

その時、女子トイレから彼女の友達が出てきて、彼女の名前を呼んだはずなのだが、紅林は俄には思い出せなかった。友達と連れ立って図書館を出る彼女の後ろ姿を見ながら、可愛いのに勿体無いな、と感じた事は思い出した。

―― 何だったっけ。下の名前、呼んでたんだけど。

「醤油ラーメン出来ましたよー」

学食のおばちゃんの声に立ち上がり、トレイにラーメン丼、割り箸、レンゲ、水の入ったグラスを乗せて、紅林はその女の子の座っているテーブルに真っ直ぐ向かった。紅林が無言で彼女の前の席に座り、ラーメンを食べ始めると、その子は一瞬固まり、その後キョロキョロと周りを見回してから、不審そうに彼の様子を見ていた。紅林は、内心彼女の挙動が可笑しくて堪らなかったが、あえて無視して無言で食べた。チラリと彼女の手元を見ると、小さな菓子パン一つで、これだけで足りるのだろうか心配になる程の量だ。

「昼メシ、それだけ？」

「う、うん」こっくりと頷いた彼女の顔は、ラーメンが食べたそうに見えた。

―― 腹を空かせた子犬っぽい。

そう思った紅林は、割り箸とレンゲを取りに席を立ち、それらを彼女に手渡して一緒に食べようと言った。

「い、一緒に？え？いいの？」

「うん。ちょっと多かった」

本当はそんな事はないのだが、一緒に食べる口実があった方がいいだろうと思ったのだ。ビックリしたであろう彼女は、少しためらったが、頂きますと言って箸を割り、遠慮がちに麺をすすった。やはりお腹が空いていたに違いない。

「…んまい…」

心底美味しそうに啜る様子が可笑しくも可愛らしく、紅林は腹を抱えて笑いたい衝動に駆られたが、テーブルの斜め下をキッと睨んで何とか堪えた。

―― こ、子犬っぽい…。

お腹を空かせた子犬が、無心に餌を食べる様子が連想され、もう！お前ってば、どんどん食べよーと！とばかりに、大好物のチャーシューもくれてやった。ありがとうございますと言いながら、ピョコンと頭を下げる様子を見たら、こいつに腹一杯食べさせてやりたいと、紅林は父親か何かのような優しい気持ちになり、思わず全部食べていいよと言ってしまった。

「え？もう食べないの？」

「うん」

これ以上一緒にいたら、きっと笑い出して止まらなくなる。紅林は自分の使った割り箸とレンゲを掴んで席を立ち、カウンターへ返すと、そのまま振り返りもせずに学食を出た。足早に廊下を抜けて玄関まで来た所で、紅林は耐えられなくなり、腹の底から大笑いした。

「あいつ、おもしれー！」

やっと笑いの発作が収まり、目尻に浮かんだ涙を指で拭いながら、外へ出た。

「ああ、思い出した。カオルだ。あの子、カオルって呼ばれてたな」

―― あのフニャツとした髪の毛を手で軽く掴んだら、きっと触り心地がいいんだろうな。

その様子を想像すると、朝からの紅林の憂鬱は、もうすっかり消えてしまったようで、彼は晴れやかに笑いながら、次の授業を受けに講義室へ向かった。



第一話 船上にて

第二話 鍵穴

第三話 イニシャル

第四話 浅草十二階

第五話 三美人

旅客船の甲板に立って海を見ている。

空は墨をぼかしたような斑な灰色で、海は溶けた鉛のようにどろりどろりとうねっている。

行き先が分からない。

風に吹かれて行き先の分からない船に乗っているのに、もう飽き飽きした。

私はくるぶしまでかかる長い白いドレスを着ている。その袖は肘まではぴったりしていて、そこから先はフワリと柔らかくに広がっている。

風にドレスがひらひらとなびく。ひらひらひらひら。

小男が一人、私の方へ近づいて来た。

「お嬢さん、帽子をおかぶりなさい。淑女は帽子をかぶるものですよ」

長い円錐型の白い帽子を持って甲板に立っているのは、アーガイル柄のスーツを着た単眼の道化だ。

帽子のてっぺんに、白いレースでできた長い飾りが付いていて、吹き流しのようには海風になびいている。

「ご親切に有難う。でも、わたくし、これから海に飛び込むところです。それは、かえって邪魔ではなくって？」

「おや、おや、これからダイビングをされるのであれば、なおのこと帽子は必要ですよ」

服の袖に付いた鈴をしゃんしゃんと鳴らしながら懇懇に帽子を薦めるものだから、仕方無く私はそれを受け取ってかぶった。

「ときにお嬢さん、貴女どうしてこんな冷たい海に飛び込もうなんて思うのですか？」

「だって、どこに行くか分からない船に乗り続けるのなんて、耐えられません。いっそ、自分から場所を定めて、この海に沈んでしまいたいのです」

「なるほど、なるほど。それではお気をつけて」

単眼の笑いは年齢不詳だ。

鈴を鳴らしながら去って行く道化を目の隅で眺めながら、私は甲板の手すりに足をかけ、えいっとばかりに身を躍らせた。

ああ！落ちる！と思ったのもつかの間、私は海面から吹き上げる重たい風に跳ね飛ばされて、凧のように空へと舞い上がった。

ドレスの袖が風をはらむ。帽子のレースが風を掴む。

「ああ、口惜しい、謀られた！」

甲板の上の小さな道化が、手を振って笑っている。

こんなざまで、何処へとも分からない所へ飛ばされるくらいなら、あのまま船に乗っていれば良かったものを。

鍵穴

古い館でございます。

木と石と金属が、程良く調和して穏やかなものです。

ドアも立派でございますしょう？

ああ、鍵でございますか？

このドアの鍵は、もうどこへ行ったやら覚えておりません。

ええ、いつも開けっ放しなので鍵など必要ないのですよ。

え？寒いから閉めましょうとおっしゃる。

はあ、まあ、どうしてもとおっしゃるなら閉めないでもございませませんが、どうもあまりよろしくないのですよ。

ドアを閉めますとね、誰かが覗くのです。

その、鍵穴から。

本当ですよ。

私も目と目が合って、腰を抜かした事があるのです。

でも、ドアを開けっ放しにしておくと、誰も覗かないのですなあ、これが。

鍵穴から覗く事に何か楽しみでも有るのかどうか、私には見当も付きませんが、お閉めになりたければどうぞお好きに。

いえ、いえ。

ただ覗かれるだけです。

何の害もありますまい。

私は骨董市やフリーマーケットを見て回るのが好きだ。

高いものは無理だけれど、千円程度のアクセサリや小物などを買って帰る事が多い。そういったものが手元に溜まってくると、今度はそれらを自分でフリーマーケットなどに出店して販売するのだ。

売るときは買ったときより、少し値段を上乗せしている。

だって、出店料を支払う事を考えたら、そうでもしないと赤字になってしまうのだもの。そんなに商売っ気があるわけじゃないけど、店を出すからには黒字にしたいじゃない。

さて、今年もお祭りの季節がやってきた。

私は早速、土日に境内で行われるフリーマーケットに出店し、ネックレスや指輪、ブローチに小物入れと女の子が喜びそうな物をキレイに並べて呼びこみを始めた。

天気は薄曇りで、午前中は客足も鈍かった。立ってるだけだと冷えてくるので、足踏みしながらウィンドブレーカーのポケットに両手を突っ込んで、作り笑いを浮かべて、いかがですかー、見て行ってくださーい、と参道を歩く人達に声を掛ける。似たような店は多いから、ここは笑顔とセールストークがモノを言うのだが、正直言うと、私はそういうのが苦手。

大体、骨董市を一人でブラブラするのが趣味の人間が、営業向きなわけがないではないか。

そんな私が、フリマに出店するなんて可ましいと思うかもしれないけれど、これはこれで楽しいからいいの。

今のところ、立ち止まって指輪などを手に取って見てくれた人はいたけれど、買うまでには至らなかった。

買いそうな人の背中をもう一押しするって、どうやればいいんだろう。

あら、四十代くらいのキレイな奥様風の女性が、この商品を横目で見ながら通り過ぎた…と思ったら戻って来た。

「いらっしゃませ～。どうぞお手に取ってご覧下さい」

目一杯柔和な笑みを浮かべて話しかけた（自分で自分の顔は見えないが）

その女性は、ちょっとお愛想にニコッとすると、七宝焼きのブローチを手に取った。

それは私が他所のフリマで買った、黒地に赤いバラをモチーフにしたブローチで、結構気に入っていたのだけれど、ちょっと値段を高く設定して出してみたのだ。

高いからと、売れ残ったら売れ残ったでそれでいいし、高く買ってもらえるならそれも嬉しい。

その人は、そのブローチをじいっと見つめ、指でなでたり摩ったりしながら、裏をひっくり返して値段を確認した。

「三千円？結構するのねえ…これ」

私は内心慌てた（買った値段はその十分の一だったので）が、張り付いた笑顔のまま、恭しく答えた。
「ええ、ちょっとお高いんですが、大変良い品ですので、そのくらいになってしまうんですねー」
「そう？これ良いお品なの？」

その人はキョトンとした顔で不思議そうに言った。私はちょっとムツとしたけど、落ち着いて言葉を続けた。

「はい。とってもキレイなモチーフですよ？ 丁寧に作ってありますし、なかなかこういうの手に入らないんですよー」

奥様が、フツと優しげに笑った。これはいい兆候だわ！ここで、ぐぐっとお客様の背中を押すのよ！
「きっとお客様にお似合いですよ。そこに鏡がございますので、よろしければお試しになってみて下さい」
ここで気に入ったら、まず絶対買ってくれるのだ！

「頂くわ」

奥様は、試すこともなく私にブローチを渡すと、おっとり小さな黒い革のバッグから札入れを出した。
「はい！有難うございます」

やった！やった！一番高いのが売れたわ。幸先がいいじゃないの。私は嬉々としてブローチの裏に貼ってある値札を剥がして、透明なビニールパックに入れ、封かん用のシールを貼った。
「それ、裏にイニシャルが書いてあるでしょう？」奥様が千円札を三枚手渡してくれる。
「え？ ええ、そうですね…。えっと、K・S って書いてありますね」お金と引き替えにブローチを渡しながら答えた。

「これ、わたくしのよ」奥様が、ローズウッド色の札入れに刺繍されたK・Sのイニシャルをチラリと見せてくれた。

「え？」な、何が？

「このブローチ、何年か前にわたくしが趣味で作ってバザーでお売りしたものなの。幾らでお売りしたかはもう憶えていないけれど」

「ええっ!？」

「わたくしのところに戻ってくる運命だったのねえ。良いお品って言ってくれてありがとう」

奥様は優雅に微笑むと、参道の雑踏に紛れて行ってしまわれた。

私は予想外の展開に、恥ずかしさで額に汗が滲んだが、あの奥様の作ったバラのブローチを、幾らかの年月、自分で使い愛でていたのかと思うと、何だか嬉しく誇らしくなった。

浅草十二階

わたくしの実家は武蔵野にございました。

女学校に通いだした頃、新しく出来た「浅草十二階」にどうしても行きたくて、お休みの日に従兄弟の宗一郎さんをお願いして連れて行ってもらったのです。

宗一郎さんは当時大学生だったのですが、ちっともお勉強をしないで、古神道や仙術など、おかしい研究ばかりしている人でした。

浅草に着くと、宗一郎さんは仲見世やお寺などに行きたがったのですが、わたくしはそんなの後回しで良いからと、宗一郎さんの羽織の袖を捕まえて、浅草十二階まで引っ張って行きました。入場料は母がくれたお小遣いでわたくしが払いましたの。

大層な人出でございましたが、中はとても面白かったのですよ。外国のお土産品だとか、色々見て回って、それは楽しかったのです。

宗一郎さんは、つまらなそうな顔をしていましたが、それでも一番上の十二階に上りましたら、まあその展望台の見晴らしの良いこと！

東京全体を一望に出来ましてね、思わず武蔵野はどこかと探しましたが、残念ながらわたくしには分かりませんでした。

宗一郎さんは一銭払って、備え付けの望遠鏡を覗いていましたわ。

それはそれは夢中で嬉しそうで、わたくし何だか一寸腹が立ったくらいです。

さんざん東京を上から眺めまして、もうそろそろ下りようという事になったのですが、八階の下りエレベーターが故障したのか、とても込んでおりました。しばらく待つわねえとわたくしが呟きましたら、宗一郎さんが小声でわたくしに言ったのです。

「アッちゃん。待つ面倒だから、僕と一緒に飛び降りないか？」と。

わたくし、吃驚して宗一郎さんの顔を見ましたが、澄ましてにこにこ笑っているんです。

「飛び降りるってどういうこと？まさか、こんな所で心中なんて、やめてよ宗ちゃん、悪い冗談よ」

不機嫌な私の物言いに驚いたのか、宗一郎さんは目を丸くしてわたくしを見つめると、すぐにアハハと陽気に笑いました。

「違うよ、アッチャン。君と僕が何で心中なんてするんだい？ああ、僕の言い方が悪かったね、言い直すよ。あのね、空を浮かんで下りの方が楽だから、一緒にどう？って言いたかったのさ」
わたくし、少しの間二の句が継げませんでしたわ。

「宗ちゃん、何言ってるの？そんな事、出来るわけじゃないの」

「それが出来るんだよ。僕は仙道を極めたのさ。おいで、見せてあげる」

言うが早いか、わたくしの腕を掴んで、先ほどの展望台に戻りました。

そして、宗一郎さんがわたくしの帯の辺りに手を回すと、急に二人の体がふわりと宙に浮いたのです。わたくしは何が何だか分からないまま、怖くて宗一郎さんにしがみつくばかりです。

「そうそう、アッチャン、しっかり僕に掴まっていなさい」

わたくしの喉から小さな悲鳴が上がりましたが、宗一郎さんは意に介さず、そのまま宙に舞い上がり、そしてゆっくりと十二階の展望台から下へと降りて行きました。

それはもう、ふわふわと体重が消えてしまったような不思議な感覚でしたが、わたくしは一方で着物の裾が気になって仕方ありませんでした。

地上へ後一尺ばかりになったあたりで、急に体重が戻って、ストーンと地面に降りた時は、怖いやら面白いやら吃驚するやらで、わたくしはじっとりと汗をかき、宗一郎さんの羽織を握りしめたまま、彼の顔を見つめておりました。

「ね、アッチャン。これで僕が仙道を極めた事、信じるかい？」

宗一郎さんは自慢気にわたくしを見下ろして言いました。

「すごいわ、宗ちゃん。わたくし、本当に驚いたわ。ただね、あの、一つ申し訳ないのだけれど」

「なんだい？」

「わたくし、展望台にパラソルを置き忘れてしまったの。取りに行ったら貰えるかしら？」

宗一郎さんは、急にがっかりした顔をしました。

「僕は、飛び降りる事は出来るんだけど、飛び上がる事は出来ないんだよ」

「まあ、なあに、それ？」

結局、係りの方をお願いして取りに行かせて貰いましたの。

仙道もあんまり役に立たないわねえ、とわたくしが嫌みを言うと、宗一郎さんは一寸むくれてしまいましたが、その後二人で仲見世に行って仲直り致しました。

あの浅草十二階も、大正の震災で崩れてしまいましたが、今でもあの展望台の事、懐かしく夢に見ますのよ。

「何処にも無い国の物語」 雅の章 第四話

私の兄は、妹の私が言うのも何ですが若い頃は大変な美少年で、女顔とでも言うのでしょうか、優しく可愛らしい上品な面立ちをしていました。ただ性格は茶目っ気のある悪戯者で、またその外見に似合わず、気性の激しい勇み肌な人だったのです。

兄が十五歳の頃、とある深窓の令嬢を見初めたのですが、お相手は高嶺の花。見ず知らずの男性が気軽に声を掛けられる方では御座いませんでした。何でも月に一度、近くのお寺にお参りに来られるそうで、兄は遠くからそのお嬢様のお姿をうっとり眺めていたのです。

春が過ぎ、日差しが夏らしくジリジリと暑くなってきた頃、兄は、あるとんでもない相談を私に持ちかけました。

「僕はどうしてもあの人と会って、どんな人か知りたいんだよ。でも、僕が話しかけても警戒されるし、お付きの女中だか乳母だかが邪魔をするだろう？お前、一緒に行ってくれないか？女連れなら少しは気を許してくれると思うのだが」

「まあ兄さん。馬鹿言わないで頂戴。いくら私が一緒でも、いかにも学生と言った格好の兄さんが話しかけたら警戒されるのは同じことよ」

私は兄の奇妙な計画に付き合わされるのは御免と思い、その計画の綻びを指摘致しましたが、兄も簡単には諦めません。しばらく考え込んでいましたが、パッと顔を輝かせてこう言いました。

「よし、分った。それなら僕も女の着物を着ようじゃないか。女二人連れなら心安いだろう？ちょっとお喋りして、どんな人か分かれば満足だ。ねえ、お前の着物を貸してくれよ。カツラはご近所の髪結いに借りて、ちょっと化粧をして日傘でも差せば男だと分かりはしないさ」

私は大慌てで断りました。

「ちょっと兄さん、止めて頂戴。そんな女装なんかして世間に知れたら、幾ら何でもばつが悪いわ。そんな事に巻き込まないで」

「お前には別に迷惑にならないだろ？何、南総里見八犬伝でも豪傑が女装してるぞ。そうと決まれば今月のお寺参りの時に、計画実行だ。！お天気が良いといいなあ」

そう言うと、兄は上機嫌で自分の部屋に行ってしまう、一人居間に残された私は、兄の奇妙奇天烈な言動に胃の痛くなる思いでしたわ。何せ、一度言い出したらきかない人でしたからね。

そうして遂にその日がやって来ました。

兄は私の着物から、黒地にモダンな幾何学模様を散らした銘仙を選び、さっさと着てしまいました。帯だけは私が締めてあげましたが、薄化粧をして束髪のカツラを付けた兄は、私がはっとするほど艶やかで美しく、白地に小花を散らした可愛らしい着物の私が霞んでしまいそうで、何だか悔しく胸の中がザワザワしたものです。

家族に見つからないようにこっそり家を抜けだすと、その日はからりと晴れた青空が清々しく、私達は、本当の女学生二人連れのようにしゃいでお寺に向かって歩き出したのです。

「ちょっと兄さん、そんなに大股で歩かないで。もっとつま先を内側にして静かに歩くのよ」

「おいおい、お前も兄さんって呼ぶのはお止めよ。姉さんと呼んどくれ」

「まあ、何だか芸妓さんみたいよ。オネエさん」

私達は何だか楽しくなってきた、ケラケラ笑いながら道を急いだものです。

二人して日傘を差し、お寺の門へ続く長い階段を上ってゆきまして、やっと着いたと汗を拭き拭き門をくぐりました。

その日はお寺で縁日がございまして、中庭に古道具を売る露天商や、紙芝居、飴屋さんなどが店を開き、それは賑やかでした。私達はお参りを手早く済ませ、例の方のお姿を探したのですが、なかなか見つかりません。

「にい…姉さん、いないの？」

「いないねえ。今日は来られないのかな。いや、それにしても女の着物って奴は暑いな。ちょっとそこの茶屋で休まないか？松の木の下で涼しそうだ」

兄さんは、扇子をパタパタ言わせて顔をあおぎながら、さっさと茶屋の濡れ縁に座ってしまいましたので、私も仕方無く横に座り、二人分のお茶とお団子をお店の女の子に頼みました。

二人してお茶を飲み一休みしていると、後ろの方で女の人の声がしましてね、それは兄さんが焦がれていたお嬢様のお付きの女中さんの声だったのです。

「まあ、お顔の色がすぐれませんわね、りょう様。お疲れでしたもの、やはりお出かけされません方がよござんした」

「少し寒気がしますが、休めば良くなります」

「この暑いのに寒気だなんて、どうしましょ。車を呼んで帰った方が良さそうですわ」

いかにもお困りのご様子だったので、私達はすぐさま席を立ち、お二人に、こちらへお掛け下さいまし、とお声を掛けました。三十前後の女中さんは私達に愛想良く頭を下げ、すらりと背の高いお嬢様を抱えるようにして濡れ縁に座らせて、お茶屋さんの中へお水を貰いに行かれました。

私は、その方を間近に拝見するのは初めてでしたが、年の頃は兄より一つ二つ上かしらと思いました。優しい桜色の地に手毬をあしらった着物をお召しで髪は島田、薔薇の簪が今風で洒落ていて、薄化粧をした目元の涼しい美人でした。兄はと言うと、お加減の悪そうなその方の横顔を心配そうに見つめて、口もきけない様子でしたので、仕方無く私が話しかけました。

「大丈夫ですか？貧血かしらね。お家は遠いのでしょうか？」

「ええ、大丈夫です。ちょっと疲れが出てしまいましたが、じき治ります。家はさほど遠くはありません。歩いてここから十分ほどです」

青ざめたお顔でにっこりされましたが、話しぶりも落ち着いていて、思ったより大人びた印象でした。

「そうですか。それなら、車に乗ればすぐですわね。私達もこのご近所なのよ。ねえ、姉さん」

私が兄に目配せすると、兄は急に話を振られてびっくりしたのか、裏返った声でフンだかウンだか申しましたので、私は可笑しくて笑ってしまいそうでした。

兄と私が、そのお嬢様を間に挟んで濡れ縁に座っていると、お付きの女中さんが水の入った湯のみを持ってきて、お嬢様に手渡しました。その方は、お水を少し口にされましたが、やはり気分はまだ優れないようでしたので、女中さんは心配になったのか、私達にこう頼んだのです。

「お嬢様方、せっかくお休みのところ申し訳ありませんが、私、下に降りて車をつかまえて参りますので、その間、りょう様のお側にいてあげてはくれませんかでしょうか？十分かそこいらで戻れると思いますので、どうぞお願い致します」

りょう様と呼ばれたお嬢様は大変恐縮されて、それには及ばない、一人で待ちますと仰いましたが、私と兄は顔を見合わせ、別に急ぎの用もないので、ここで三人お喋りでもしながらお待ちしますと言いますと、女中さんはほっとした顔でお礼を言い、急いで門を出て行かれました。

「おくつろぎの所、誠に申し訳ございません」

りょう様は申し訳なさそうなお顔をされましたが、その様子も大変儂げで、兄などは、ただもうニコニコしているばかりでした。

具合の悪そうなりょう様に、あれこれ話しかけるのもお気の毒なので、私達はただじっとお側に付いていたのですが、ふと目の前に人が立った気配を覚えて顔を上げましたところ、そこには見知らぬ若い男が三人、ニヤニヤといやらしく笑っておりました。一人は着流し、二人は職人風でしたが、一目で関わり合いにならない方が良くと思われる風体でございました。

兄は、キッと眉を怒らせてその男達を睨みつけ、りょう様はハンケチで口元を押さえ、視線だけチラリとその男達に向けました。私と言えば、ただもう怖くて、濡れ縁の縁を握りしめ身じろぎも出来ませんでした。

そして、その着流しの男が不躰にもこう言ったのです。

「おやまあ、別嬪さんが三人お揃いじゃないか。丁度良い、俺達も三人だ。茶屋の二階にでも行って、ちょっと遊ばないかい？」

私は濡れ縁から飛び上がり、急いで兄の後ろにしがみつきました。兄と言えば、日傘を両手で斜めに持ち、腰掛けたまま足を踏ん張り喧嘩の構えです。

「おや、そっちのお嬢ちゃんは、まだねんねだな。いずれお姉ちゃん達のような美人になろうが、まだ男の相手は早過ぎるか」

そう言うとゲラゲラ笑い出しましたので、私は侮辱されて恥ずかしいやら腹が立つやら、思わず目に涙が滲みました。

「兄貴、そんな小娘より、こっちのお上品な姐さんの方がいいんじゃないかねえか？丁度年頃、番茶も出花だ」

そう言って、職人風の痩せた小男が、りょう様の肩に手を触れようとした時、我慢しきれなくなった兄がいきなり飛び出し、体ごとぶつかって、その男を跳ね飛ばしてしまったのです！小柄な男は文字通り宙を飛んで、地面にひっくり返ってしまいました。

「イテテテ！何、しやがるこのアマ！」

兄は日傘を木刀替わりに一振りし、残りの二人を睨みつけました。

こんな時、普段の兄なら、妹の私でも赤面するような啖呵を切った事でしょうが、何せりょう様の手前、男だと知られたくなかったのでしょう。終始無言で、ただその顔には怒気が漲り上気してほんのり赤く、見るも恐ろしい美人でございました。

「何だ、何だ！威勢がいいな姐ちゃん！おい、俺達に喧嘩を売ろうたあ、大した度胸だ！」

そう言うと、着流しの男も喧嘩の構えで、兄に向かって飛びかかって行きましたが、兄は目にも留まらぬ早さで男をかわし、次いで腕を後ろに振り上げ、ギャッと男が悲鳴を上げたところ、尻を思いっきり蹴り飛ばして地面に転がしてしまいました。

「あ、兄貴！畜生、そんなら俺はこっちの女を…」

もう一人の職人風の男が、りょう様に手を掛けようとした瞬間、驚いたことにりょう様は、その男の左頬に思いっきりその右の拳を打ち込んだのです！それはもう、拳闘家と見紛うような身のこなしでございました。

「さっきから、うるっせえんだよ、テメェら！こちとら具合が悪いんだい！静かにしやがれ、馬鹿野郎があッ！！」

りょう様のお腹の底に響くような啖呵に、殴られた男は腰を抜かして座り込み、周囲の人達も目を剥いてこちらを見ておりました。着流しの男に馬乗りになっていた兄も、あっけに取られてりょう様を見つめておられます。

りょう様はすっと立ち上がると、地面に転がる男達を睨め廻して冷ややかに言い放ちました。

「何処の破落戸か知らねえが、命が惜しけりゃ、こちらのお嬢さん方にお詫びして、とっとと消えやがれ！もたもたしてると、臓腑の色まで見せて貰うぜ！」

いつの間にか、りょう様の右手には懐刀が握られており、いつでも抜けるように鞘から半分刃が見えて、陽を反射してキラリと閃きました。兄が吃驚して立ち上がると、男三人はすっかり怯え、失礼をお許し下さいお嬢様方と、慌てて地面に頭を擦り付けて謝り、こけつまろびつ境内から逃げ出して行きました。

りょう様は私の方を振り返ると、鉄火場の阿婆擦れから元のお嬢様に戻ってにっこりされました。

「もう大丈夫だよ」

そう言うと、今度は兄の方へ歩み寄り、惚れ惚れと兄を見つめてこう言ったのです。

「強くて綺麗で粋だねえ、お嬢さん。俺は、あんたみたいなイイ女大好きさ」

兄はポカンとして、ただりょう様の顔を穴が開くほど見つめていましたが、そんな時、例のお付きの女中さんが息を切らして戻ってきたのです。

「あれ、あれ、お待たせして申し訳ございませんでした、お嬢様方、有難うございます。やっと下で車を拾えました。さあ、りょう様、帰りましょ」

「何だか具合が少し良くなったが、まあいいわ。それではお嬢様達、ご機嫌よう」

りょう様は、たおやかに頭を下げると、女中さんと二人、帰って行かれました。

しばらくお二人の背中を見つめていた私と兄ですが、兄は女の服装をしている事がどうでも良くなったのか、腰に両手を当て足を開いて仁王立ちし、いかにも残念という風に言いました。

「あれは男だな」

「え？男？ええ？そうなの？」

「女形の役者かなんかだろう。深窓のご令嬢と思ったのは僕の勘違いで、梨園の御曹司ってところか…。いや、参ったな。まるで女だ」

「…言われてみれば、確かに声が少し太かったかもねえ…」

兄はホーッと大きく溜息をついてから、さっぱりしたように言いました。

「帰るか。カツラが蒸れて痒くて仕方無い」

「そうね。帰りましょう」

あの、女より美しいりょう様に「イイ女」と言われた兄の事を少し心配に思いながら、私達はまた長い階段を下りて家路についたのです。

獣の章



第一話 猫の駐在

第二話 翼十人十色

第三話 羊飼い

第四話 神獣

第五話 恨み猫

猫の駐在

〇町は人口二千人の小さな田舎町だ。昭和四十年代までは炭鉱で栄えていた。

ドミノのように等間隔に建てられた画一的な石炭会社の宿舎には、全盛時、溢れるほどの従業員が住んでいたが、廃坑に伴い人々は町を捨て、人口はあっという間に半分に減った。

住む者がいなくなった途端、玄関や窓に板を打ち付けられた件の官舎は、風雪にさらされ数年で白っ茶けた廃屋に変わる。そして、町は眠ったように静かになった。

こんなゴーストタウンのような町にも駐在所がある。

年配の気のいいお巡りさんが勤務しているが、老人ばかりの地域の為か、これと言った事件など着任以来一度も起こっていない。たまにはお婆ちゃんが帰って来ないだの、スズメバチの巣が見つかっただの、それなりに大忙しになることもある。そんな時には駐在所を空けざるを得ないので、留守番を置くことにしている。

猫の「漱石」である。

漱石は黒猫で、四肢の先っぽと喉のあたりが白い。元々は野良猫だったのを、お巡りさんが保護し、そのまま駐在所で面倒をみているのだ。

お巡りさんは、この猫が猫と言うにはあまりに賢く、言語を理解しているのではないかと思うほど思慮深く見える事に深く感じ入り、かの文豪の名前を拝借したのである。

ご主人様であるお巡りさんが自転車に乗って出かけて行くと、漱石はおもむろに机に飛び乗り、駐在所の留守を守り、相談者が来れば、警官代行として真面目に話し相手を勤めるのだ。

勿論、何を聞かれても話しかけられても「にゃあ」としか言わない。

場合によっては、そのぷくぷくした肉球を相談者の掌に乗せ、何も言うな、分っているよ、と慰めることもやぶさかではない。基本、愚痴は黙って聞く。愚痴を言いたい婦女子に、アドバイスは不要なのである。

ただ、その柔らかい毛並みを撫でさせてやれば良いのだ。さすれば解決は自ら起こるであろう。漱石はそう確信している。気持ちが落ち着き、手を振って帰ってゆく相談者の笑顔を見て、漱石は満足気にその緑色の瞳を細めるのであった。

この賢い漱石のことだ、もしこの町で猟奇殺人事件や、遺産を巡る血族間の骨肉の争いなどが起こったら、かの探偵小説に登場するあまたの猫のように、鮮やかな手並みを見せて事件を解決に導くことは疑いない。

そんな有能な漱石ではあるが、鼻薬に弱いのが玉に瑕である。お巡りさんは、漱石の為に机の前に大きな書き付けを貼っているのだ。

「またたびお断り」

今日はまだ相談者が一人も訪れない。眠ったような町で無聊をかこつ漱石であった。

「何処にも無い国の物語」 獣の章 第一話

翼十人十色

ある日お風呂に入っている時、鏡に映った自分の背中に翼が見えた。

絵本の天使のような美しい白い翼ではなく、スズメのような茶色のちっちゃいのが一組、ちんまりと付いている。動かそうとするとヒラヒラと動くが、空は飛べないみたいだ。

てゆーか、目には見えているが、実体が無いのか、服を着る時も別に気にならず、意識してみると服の上にもチョココンと茶色い翼が見える。

不思議なこともあるもんだと思ったが、害は無いようなので気にしない事にした。

仕事に行こうと、地下鉄駅に続くいつもの道を歩いていると、同じような出勤途中の人達の背中が気になる。

目を凝らして見ると、何人かの背中には確かに翼が有るのが見えた。

耳にイヤホンを付けてリズムを取っている、大学生風の男の子の背中には、灰紫色の土鳩の翼。

歩道をピンヒールのブーツで走る OL さんの背中には、水色のインコの翼。

ガタイのいい作業服姿のおじさんの背中には、おお、見事な純白の白鳥の翼が！

セレクトが良く解らない。

幼稚園に行く途中の、小さな女の子の背中にはモンシロチョウの羽がヒラヒラしていた。

その子の若い茶髪のお母さんの背中には、フワフワした真っ黄色の巻き毛カナリアの翼が付いている。

付いている人が3割、付いていない人が7割って感じ。

地下鉄の車両に乗ると、制服姿の女子高生が数人群れていた。

コウモリ一人、カラス一人、キジバト一人、カワセミ一人。

カワセミ嬢がちょっと羨ましい。

地下鉄を降りる時、スーツ姿の若いサラリーマンと入れ違いになった。

すれ違いざまに後ろを振り返ると、彼の背中に私と同じスズメの翼が付いていた。

あっ、と思ったが車両のドアが閉まり、地下鉄は行ってしまった。

残念。

今度見つけたら、追っかけてみようかな。

羊飼

近所に羊を飼っている人がいて、時々散歩をさせているところを見かける。

羊は大きくムクムクとして目付きが悪く、密集したその白い毛は、まだらに灰色にくすみ、あんまり可愛くなかった。

その首には大型犬に付けるような首輪がゆるく巻かれ、土佐犬でも引きそうな紅白の太い組紐のような綱に繋がっていた。その綱を握っているのは、グレーの作業着の上下を着たおじいさんで、こちら目付きが悪く無表情に羊を連れて歩いている。

散歩はゆっくりで、しょっちゅう立ち止まっては、路上にわずかに生えている雑草を根こそぎ食べて行くので、後ろから歩いていてもすぐに追い越してしまう為、その羊と飼い主らしき老人が、どこから来てどこへ行くのかは分からなかった。いつも今度会ったら声を掛けてみようと思うのだが、出勤途中だとノンビリしてもいられないので、ああ、また次の機会に、と思いながらチャンスを掴めずにいた。

ある日曜の午前中、起きたものの食べる物が何も無いのに気づいて、やむなく近所のコンビニへ行こうとアパートを出ると、すぐ先を例の羊と老人が歩いているのを見かけた。

これはいい機会だと思い、後ろから声を掛けてみた。

「お早うございます。羊、可愛いですねえ」と。

すると老人は、こちらの顔も見ず、羊の方を見下ろしたまま

「可愛くはないだろう」と、もっさりと言った。

私は一瞬たじろいだが、ままよ、と質問してみた。

「その羊は何の為に飼っているんですか？やっぱり、毛を刈って糸を紡ぐんですかね？」

「糸？糸なんか要らんよ。そんな物、買った方が早いだろ？」

ぶっきらぼうな答えに、再びたじろいだが、ええい、ままよ、とまた質問をした。

「はあ、まあそうかもしれませんねえ。では、そのう、それはやっぱりペットとして飼っていらっしゃるんですか？」

度重なる質問に気分を害したのか、老人は顔を上げて初めて私の顔を見た。瞳がうす青く濁っていた。

「まあ、食うものが無くなったら食うかもな」

「た、食べるんですか？」

「不味いだろうな。俺と同じで年寄りだから」

「…そう、なんですかねえ…」

羊は自分の事が話題になっているのが解るのか、ふと顔を上げて私達の方を見た。目の瞳孔が細く弓なりになっている。

羊の瞳孔の奇妙な形を見詰めていると、老人がポツリと話した。

「雑草の処理をしてくれるから貰ったんだわ」

「雑草？畑とかの？」

「そう。自分の畑の雑草処理にな。したらさ、思った以上に食うのよ、こいつ」

「ああ、羊って沢山食べるんでしょうね」

「食うわ食うわ。仕方ないからさ、こうやって近所の雑草処理さ」

なるほど、と合点がいった。

「ああ…。でも、まあ、お散歩は体にいいし一石二鳥ですよ」

「まあなあ。頼まれれば近所の畑や庭にも行くけどね。作物を食べないように、一緒に行かねばなんねえ。

それが面倒でなあ」

「なるほどですねえ」

老人は薄青い目でじっと見詰めて言葉を続ける。

「あんたんところにも、畑があるなら行ってやっぞ」

顔の前で手をヒラヒラさせてお断りした。

「アパート暮らしなので、生憎畑も庭も無いんです。残念ですけど」

「そっか。したらな」

老人は、もっさりした羊の綱を引いて歩き出した。

「あの、その羊、なんて名前なんですか？」老人の背中に向かって最後の質問をした。

「名前なんてねえよ。羊は羊だべや」

「なるほどですねえ」

そうだ。羊には羊が付けた名前なんてあるわけがない。

そう、それは「羊」ですらないのだから。

神獣

まだわしが子供の頃の事じゃ。そろそろ夏の盛りを迎えようという時分ではあったが、その日の夜は涼しく、わしは母さまと、山中の寂しいけもの道を歩いていた。

その晩は、怖いほどに冷たく輝く満月が空のてっぺんに上っていて、乾いた土の道は月明かりで灰白く浮かび上がり、周囲に鬱蒼と茂った木々の葉先は、白々と照り輝いておったよ。

わしらは空きっ腹を抱えてとぼとぼと歩いていたのだが、何やら鼻先を食べ物匂いがかすめて立ち止まった。

わしが、母さま、食べ物の匂いがするよと言うと、母さまは、だめじゃだめじゃ、こんな所で食べ物の匂いがするなんておかしい事じゃと取り合ってはくれなんだ。

でも旨そうな匂いがするよ、これはきっと魚の匂いだよ、と尚もわしが言いつのると、母さまは困ったような顔をしたが、道の端にある大きな松の木の下に歩み寄り、その下草を掻き分けてみしてくれた。

そしたらな、そこには川魚の干したのが三四匹、無造作に置かれてあったのじゃ。

わしが食べ物を見つけた嬉しさにぱっと干し魚に飛びついたのと、母さまがわしを遮ろうと手を出したのと殆ど同時でござった。母さまはギャッと大声を上げると、その場にうずくまってしまわれた。

どうした事かと母さまを見ると、その右手首は大きな黒い口のような物にがっしりと挟まれ、赤い血が滲んでおった。

わしは吃驚仰天し、母さまの腕にしがみついてその黒い口から細い手首を引っ張り出そうとしたのだが、そやつはどうにもこうにも口を開かず、母さまは痛さに胸が潰れそうな呻き声を出されたよ。

わしはどうして良いか分からず、泣きながら母さまにしがみついておると、母さまも涙を流しながらわしに言うた。

坊よ、坊よ、よう聞け。母はもう、この罠から逃れられまい。日が昇る頃には命も絶えよう。お前はもう、独り立ちせねばなるまいよ。少し早いけど、出来ぬ事はなかり。母は、もうひと通りの事は教えたつもりじゃ。お前はもう行け、ここを早う離れるが良い。そう言うて、わしの泣きぬれた顔を舐めて下さった。

わしは、嫌じゃ嫌じゃ、母さまの側を離れんと駄々をこねると、母さまは怒ったようにわしの首筋を噛み、道の向こうの叢に放りこんでしまわれた。わしはその叢の中で腹ばいになり、自分の引き起こした恐ろしい出来事におびえ、ただおめおめと泣きながら、道の向こうで横ざまになっておらっしゃる母さまを見つめておった。

夏の朝は早い。月がまだ沈みきらぬうちに太陽は顔を出し、朝もやでけぶる獣道を一匹の大きなケダモノがやってきおった。それは見るも恐ろしい二本足で立つケダモノで、体中に毛衣や棒や袋やらを括りつけ、嫌な匂いをまき散らし、地獄から立ち現れたような禍々しさであった。

わしは恐ろしさに身が竦み、ブルブル震えながら叢に隠れて様子を伺っておった。

母さまは立ち上がって、そのケダモノに噛み付こうとしたが、右足が動かないので自由が利かない。そのケダモノは笑いながら、おお、これは夏場と言うに綺麗な狐よ。お前の毛衣、さぞや高くうれようぞ、と高らかに言い、右手に握った黒い棒で、いきなり母さまの頭を殴りつけた。母さまは物も言わずにその場に倒れ、それっきり動かなくなったのだよ。

わしはもう見ていられず、叢に鼻先を突っ込んで、ただただ震えておった。道の向こうでは、二本足のケダモノが何かゴソゴソやっている音が聞こえたが、母さまの声はもう聞こえなんだ。

ケダモノの気配が消えて大分経ってから、わしはやっとの事で体を起こし、あの松の木の行まで行ってみたが、母さまの姿はどこにも無く、ただ赤い血の滴りが幾らか、乾いた土に吸い込まれていただけだったのじゃ。

わしは悲しゅうて悲しゅうて悲しゅうて、喉が哽れるほど泣いておったが、母さまが戻るわけもなく、仕方無くとぼとぼと山の寝ぐらへ帰ったわ。

それからわしは、山の神、祖先の神に祈った。

わしを強くさせて下さい、あのケダモノよりずっとずっと強くさせて下さいとな。

どれほどの日々祈ったかは分からん。分からんが、ある日川へ水を飲みに行き驚いたよ。川面に映ったわしの姿は、母さまのような枯葉色ではなく、雪のように白くなっておった。その上、眼の色が違う。片目は血の滲んだ月のように黄色く、片目は春の空のように薄蒼かった。何時からそうだったのか知らず、なぜそうなったのかも分からんのだ。

わしは、己の姿が山の中で一際目立つ様になったのは、神か邪かは知らぬが、不思議な力が味方してくれたものと思い、心を強くした。そして本当にわしは、風のように地を馳せ、稲妻のように空を飛び、雲を呼んで雨さえ降らせる事が出来るようになったのだ。

それからわしは、山にやって来るあの二本足のケダモノ達に悪さを仕掛けるようになった。

大きいものも、小さいものも、若いのも年寄りも、男も女も手加減無しじゃ。

幻を見せて川に突き落とし、握り飯と思わせて馬の糞を喰わせ、山に仕掛けた罠という罠から餌だけ奪い取り、散々に苛めてやったわ。ただし命までは取らなんだ。笑いながらイキモノの命を奪うような、あやつらと同じ浅ましきものになるのは真っ平御免じゃ。

そのうち、あやつらは可笑しな事をするようになりおった。わしが脅かしてやろうとこの姿を現すと、大地に平伏し手を合わせ、ブツブツ呟きながら、飯だの酒だのを置いて逃げるのだ。最初は気味悪く、母さまの事も思い出し手は出さなんだが、そのうちどうも騙す気は無いようだ分った。

しかし、何でそのような事をするのか合点が行かぬ。置いていった酒を舐めながら、二本足のする事は見当も付かぬ、と不思議に思ったものよ。そうそう、山の中に奇妙な物も作っていったぞ。木で出来た大きな箱の前に二本の柱を立て、その上にまた棒を二本横に渡してあってな、その左右に石で出来た獣の拵え物が有るのだが、あれはどうもわしの似姿ではないかと思うのだ。

そうして入れ替わり立ち替わりそこに現れて、頭を下げ食べ物を置き、金をくりゃれとか病を治せとか、好き勝手な事をブツブツ話して帰るのじゃ。勿論、あやつらの欲深な願い事など叶える気は毛頭無いわ。そんな義理がどこに有るものか。全く、一体わしを何だと思うておるのだろう。びゃっこさま、いなりさま、きんめぎんめさま、と様々に名を付け呼んでおるが、あれは皆わしの事じゃろうか。

わしは相変わらずあいつらに悪さをしておるよ。

山を荒らす馬鹿者の車を壊し、卑劣な者同士を仲違いさせ、愚か者を道に迷わせて遊んでおる。

齢を重ね、わしの体はとうに朽ちてしまったが、あの体に宿った力がわしの体にとって変わったのか、わしの姿は昔のままじゃ。山も変わり村も変わった。獣を殺めに来る二本足もおらんようになった。それでもわしは山を守る為にここにおるのじゃ。二本足を守る為におるわけが無い。

なのに今日もあやつらはやってくるのよ。あの柱をくぐって鈴を鳴らして、何やらを投げて祈っていくのじゃ。一体何のまじないかのう。愚かな事じゃ。わしも昔の恨みはとうに消えたが、あやつらの事を好きにはなれぬわ。

そうよのう、もしわしが気に入るような二本足が現れたら、その時はそやつの願い、叶えてやってもいいと思うぞ。

六根清浄にして訪れるが良い。

恨み猫

古い二階建てのアパートに一人で暮らしていた時の事だ。

僕の部屋は八畳一間で、二階の端っこの部屋だった。一つしかない窓のすぐ下には、大家さんの物置の屋根があった。時々野良猫が、その物置の屋根伝いに僕の部屋に遊びに来ていた。

人に慣れていて、窓を開けていると勝手に入ってきては部屋の中を歩きまわり、飽きるとまた窓から出て行くか、部屋のドアを開けると声と爪で催促する尊大で勝手な三毛猫だった。僕は動物が嫌いではないので気が向けば煮干などを与えて相手をしていた。

ある夏の夜、連日の残業で疲れ果てて帰宅し、部屋の空気を入れ替えようと窓を開けると、まるで待っていたかのように件の猫が窓枠に飛びつき部屋に侵入してきた。

「おい、疲れていてすぐに寝たいんだよ。今日は構ってやれないから帰ってくれ」

僕がそう言うと、猫はひどく不機嫌な目付きで僕を睨んだ。

いつもならそんな事はしないのだが、早く休みたかった僕は部屋に有った雑誌を掴むと、それで猫を追い払うようにして窓際まで追い詰め、外へ飛び出したところで窓を閉め、鍵を掛けた。

僕は邪魔者を追い出してホッとすると、さっさと着替えて灯りを消し、ベッドに潜り込んだ。

心地良い眠りに体が溶けそうになってきた頃、突然部屋の窓がガラリと音を立てて開き、部屋の中で、ニャーオ！と威嚇するような猫の叫び声が響いた。

驚いた僕は目を開けて暗闇の中を見廻したが勿論どこにも猫などいない。おかしいなと思った時、突然右頬に鋭い痛みを感じた。

慌てて起き上がり、灯りを付けて壁に掛けてある鏡を見ると、右頬に五センチほどの細い切り傷が出来ていて、うっすらと血が滲んでいた。閉めて鍵を掛けたはずの窓は全開になっているし、何が何だか訳が分からなかったが、僕は気を取り直し、窓を再び閉め鍵を掛けて寝直した。

翌日その顔で入社すると事務の女の子にからかわれた。

「あら、どこの雌猫に引っかけられたんですか？」

そう言えば三毛猫ってのは殆ど雌らしいなと思い至った。

猫も女も恨みは深いらしい。条件が両方揃えば尚更なのだろう。



第一話 メッセージ・イン・ア・ボトル

第二話 ドラゴン・カフェ

第三話 螺旋階段

第四話 鮎子

第五話 虹

今から七十年ほど前のこと。

私は小学校の夏休みを祖父母の家で過ごしていた。庭先から五分も走れば、すぐ海岸に出られる長閑な田舎の家は、都会育ちの私にとって、非日常的な楽しさがあった。

夏休みの思い出に綺麗な貝殻でも集めようと、朝御飯を食べるとすぐに浜に向かった。

いつもの様に波打ち際を裸足で散策していると、大きな流木の上に、五六歳の男の子が一人座っているのが見えた。

紺の紺の着物に鼠色の袴を付け、白い学生帽をかぶっている。

この辺の子じゃないわねえ…。

田舎の子は、普通袴なんて着ていない。都会の良家のお坊ちゃまという服装だ。

彼は柳で編んだカゴを傍らに置いていて、中には牛乳瓶のようなガラス瓶が数本詰まっている。男の子は、そのガラス瓶を口に当て、何かゴニョゴニョと呟くと素早くコルクで栓をした。

私は、その子が何をしているのか気になって声を掛けてみた。

「ねえ、何をしているの？」

男の子はちょっとびっくりしたように私を見たが、はにかんでうつむきながら答えた。

「お手紙を送るの…」

「お手紙？便箋とか葉書は使わないの？」

男の子は恥ずかしそうに頷いた。

「声のお手紙だよ」

そう言うと、さっきコルク栓で封をしたガラス瓶を、ぽーんと波間に放り投げた。ガラス瓶は、一二度浮き沈みを繰り返した後、すいすいと白波の向こうへ小さくなっていった。

良く分からないけど、何だか素敵なことをしているなあ、と羨ましく思いながら、青い海と小さなガラス瓶の煌きを目を細めて眺めていた。

「おねえちゃんも欲しい？」

男の子が私の顔を見上げて、嬉しそうに聞いた。

「うん、欲しいな。くれるの？」

「送ってあげる。お名前教えて」

私が自分の名前を言うと、男の子はそれを繰り返して、覚えた、と笑った。

私は手を振って男の子と別れ、また貝殻を探して波打ち際を歩きまわった。しばらくして、男の子の方を振り返ると、流木の上に彼の姿はもう無かった。

夏休みの終わりが近づいたが一向にガラス瓶は届かず、あの子はどうしただろうと後ろ髪引かれながらも、私は迎えに来た母と一緒に家へ帰った。

その後、あの長い戦争が起こり、一時期家族はバラバラになったが、幸いなことに家族全員無事に終戦を迎えられた。

やっと父が復員し、私も学校に行けるようになった頃のこと、ずっと使っていなかった玄関脇の牛乳入れに、コルクで栓をした透明なガラス瓶が一本入っていた。

気味悪がる母の手から、私はそのガラス瓶を奪い取り、急いで栓を抜いてビンの口を耳に当てた。ビンの奥から、かすかに波の音と、男の子の声が聞こえた。

「またきてね」

そして、ギー、ギーという不思議な音が続いた。

それは一度だけで、その後何度試しても、もう何も聞こえなかった。

長じてから、あれはイルカの歌だったのではないかと思うようになった。瓶は今も大事に持っている。

ドラゴン・カフェ

昔の同僚が、脱サラして飲食店を始めるんだと電話を掛けてきた。

「昔、カフェに使われていた物件なんだよ。大正の末に建てられた木造モルタル二階建てで、風情があってカッコイイんだ。二階は住居にして一階が店舗なんだけど、水廻りとか冷暖房は総取替えしたから、結構金はかかったよ」

このご時世に独立とはチャレンジャーだな、と呆れもしたが羨ましくもあった。

「へえ、いいところ見つけたなあ。それでカフェにするのか？それともバー？」

「取りあえずバーで始めて、落ち着いたらランチくらい出せるようにするつもり」

「そうかあ。オープン決まったら連絡くれよ。友達連れて飲みに行くから」

「ああ、ご贔負に頼むよ。もう内装工事も済んだし什器も入れたから、来月には開店するつもりなんだ。」

あいつの声には、夢に向かって張り切っている高揚感があった。俺も、その店の開店を心待ちにしていた。なのに、一ヶ月経っても二ヶ月経っても連絡が来ない。

ちょっと心配になって携帯にメールを送ってみたが、返事が無いので、これはいよいよ何かあったかと、ある日の夕方、うろ覚えしていた住所を頼りに、その建物を探しに行ってみた。

一昔、いや二昔ほど前に栄えた繁華街の一角に、その建物はあった。

Y字路の真ん中に建つピンク色に塗られた低めの二階建てで、塗装こそ新しいが、年季の入った建物だとすぐに分る。

建物は古く小さいのに、二階の小さなバルコニーなど、妙に凝った意匠なのが目立つ。

そして、正面にある木のドアには、燻し銀色の小さな龍のプレートが嵌められていた。

龍児の龍だ。

あいつの名前からデザインされたプレートに間違いない。

建物の造りは昔のままらしく、木のドアにスチール製のパイプで出来た取っ手が斜めに付いている。

思い切ってそのドアを引くと鍵は掛かっておらず、カランとドアベルを鳴らしてドアが開いた。

「龍児？」

中は思いの外狭く、薄暗い店内には誰もいない。

シックなテーブルやソファが並んでいるが営業している様子も無い。しかし、何となく人が生活している雰囲気を感じた。

レジの後ろに急な階段が見えたので上ってみる事にした。

「龍児？竹川だけど、いるか？」

少々気味が悪いので、なるべく明るく声を掛けた。

階段を上がり切ると狭い廊下があり、茶色く変色した襖で仕切られた部屋が二つほど並んでいた。

明かり取りの天窓から、夕日が差して、その空間はうっすらとオレンジ色に染められていた。

思い切って手前の襖を開けると、こちらに背を向けて座っている男が居たのでギョッとしたが、それは裸に古い女物の着物を引っ掛けて胡座をかいている龍児だった。

「龍児、いるんなら返事しろよ。…お前、大丈夫か…？」

ゆっくり振り返った龍児の目は虚ろで、夢でも見ているかのように俺のことを眺めて言った。

「おう、圭介。下で気に入った娘、見つけたか？隣の部屋が空いてるから、使っていいぞ」

「何、言ってんのお前。下には誰もいないぞ」

尋常では無い様子に息を飲んだが、努めて平静を装って靴を脱ぎ、その小さな和室に足を踏み入れた。

畳は日に焼け、縁は擦り切れて退色している。黴臭い匂いが漂い、低い天井は黒く煤けていた。

「居るだろ。今日は銀子と小夜子がいるはずだ。後から美香も来るんじゃないかな…。小鈴はダメだぞ。アレは俺の女だから…」

「おい、お前、しっかりしろよ。こんな所で一人で何やってんだよ！」

龍児の隣に座って肩に手を掛け揺さぶったが、ニヤニヤ笑うばかりで要領を得ない。

すると、突然下の方から音楽が聞こえてきた。

それは、昔の記録映画などで聞いたことが有る、音飛びのするレコードを蓄音機で鳴らしているような切れ切れの女の歌だった。

俺は時空が歪んだような恐怖に背筋が寒くなり、体が震えてきたが、龍児は相変わらず機嫌よく笑っている。

「ほら、あれは銀子の好きな曲なんだよ。あいつ美人だし話が上手いから客受けがいいんだ。チップだけで、一晩に何十円も稼ぐんだぜ」

――落ち着け、落ち着け、落ち着け。俺はおまじないみたいにこの言葉を胸の裡で繰り返し、唾をゴクリと飲み込んでから龍児に言った。

「そうだってな、お前の店は美人揃いだって有名だよ。ところで、近所にいいカフェが一つ出来たらしいぞ。

偵察がてら行って見ないか？今日は俺、金が有るから一杯おごるよ」

龍児は、どうしようかな、ともごもご言っていたが、俺は構わず衣紋掛けに掛けてあった龍児のジャケットやパンツを外して着替えさせ、靴も履かせてから引きずるように階段を下りた。

一階に下りた時、確かにどこからか音楽が聞こえ、龍児は誰かに、ちょっと出かけて来るよと酔っぱらいの様な口調で陽気に話しかけていた。

俺は自分の足元だけ見ながら、龍児を引っ張ってドアの外へ急いだ。

その時、一瞬、自分の足の近くに見えたものが有った。

紫色の鼻緒の草履、白い足袋、白地に紫の矢絣の着物の裾…。

俺は龍児の腕を捕まえたまま、全力で通りに駆け出した。

「いたた、痛えよ！圭介、痛えって！」

どれほど走ったか、気がつくところは賑やかな繁華街で、すぐ頭上にはパチスロ屋の大きなネオンサインが虹色にパターンを変えながら輝いていた。

龍児は、顔を歪め怪訝そうに俺を見つめている。俺は掴んでいた腕を放して龍児に向き直った。

「龍児、お前、お前な…小鈴って誰だ？」

龍児はびっくりして、目を見開いている。

「こ、小鈴？」

「矢絣の着物の女か？」

「矢絣の着物？…紫の…小鈴…」

両手で頭を押さえて宙空を見つめ、龍児は黙ってしまった。

「龍児、しっかりしろよ！おい！今は何年だ？」

尚も食い下がって詰問する俺に、考え考え、あいつは答えた。

「今年は何年か…？去年、大震災があったから…今年は何と…」

「震災？東日本大震災は、ついこないだの事だろ？」

「東日本？何、言ってんだ。関東大震災だよ。ああ…今年は大正十三年だな…」

「おい、おい！冗談じゃないぞ！今年は何年だ！平成二十三年、2011年だ！21世紀だろ?!思い出せよ！」

「へいせい…？21世紀…」

龍児はゆっくり周りを見廻した。

派手な繁華街のネオンサイン、耳にイヤホン片手に携帯の女子高生、金髪にピアスのチラシ配りの若者、マウンテンバイクに颯爽とまたがる老人、チワワを連れて散歩するギャル、連なって走る大型の観光バス、牛丼屋の赤い幟、バイクの爆音、平成の今の現実が龍児の脳に流れこんで記憶を揺さぶる。

「ああ、ああ…」

龍児は両手で顔を覆うと、その場にしゃがみ込んでしまった。道行く人達は、彼を危ない不審者と思い避けて通り過ぎる。俺は龍児の両肩に手を置き、ゆっくりと話しかけた。

「なあ龍児、何があったか知らないが、あの店ヤバイよ。悪いことは言わない。もう戻るな」

龍児は顔から手を離し、真顔で首を横に振った。

「駄目だ。あの店の為に俺は貯金をはたいたんだ。俺は、あの店諦めねえよ」

「馬鹿！お前ヤバイって！あの店は、何か憑いてるって言うより、時間の流れが変な感じがするんだよ！」
思わず声を荒らげた俺に、龍児は意外にも笑顔を返した。

「…ああ、いいねえ、それ頂き」

「な、何だって？」

そしてゆっくり立ち上がると、先程までの混乱はすっかり収まったらしく、胸を張ってハッキリと言った。
「ありがとよ、圭介。俺、仕切り直すわ。オープンする時は連絡するから、必ず来てくれな」

「おい、お前大丈夫か…？」

「大丈夫、大丈夫。あ、俺、店に戻るわ。じゃあな」

「おい！」

止める間もなく龍児は小走りに駆けて行ってしまった。残された俺は、もう龍児を追いかける気力も体力も無く、小さくなってゆく奴の背中をただ見詰めるだけだった。

それから二週間ほどして、龍児から開店案内の葉書が届いた。

店名はドラゴン・カフェ。

案内状はレトロなデザインで、矢絣の着物に胸高のエプロンを着けた女性のイラストが目を引く。
キャッチコピーがこれだ。

「いざ来たれ、大正浪漫溢れる魅惑のカフェへ。芸術と珈琲を愛する貴殿に、至福のひとつときを」

「なんつーベタな…」

俺は、バーからあっさりレトロなメイドカフェ？に転向した龍児の変り身の早さに驚いたが、妖しいモノに取り憑かれようともただでは起きない、その商魂逞しさに、もっと驚いた。

そして、オープン後二三日してから、俺はそのドラゴン・カフェに寄ってみたところ、その人気ぶりにまた驚いた。

「おお！圭介！いらっしゃい。カウンターでいいか？」

機嫌よく迎えてくれた龍児は元気そうで、黒いパンツに黒いベスト、白いドレスシャツに黒いリボンのようなタイを締めている。後で聞いたが、ボヘミアンタイと言うものらしい。

顔色も良く、おかしなものに取り憑かれている様子はなかったので、俺は一安心した。

そして、和服に白いエプロンを着けたウェイトレスが二人、忙しそうに立ち働いていた。

カウンターにはもう一人、所謂書生ファッションの袴姿の若者がいて、ビールサーバーからグラスにビールを注いでいる。

店内の装飾は、以前来た時と大分変わっていて、全くのレトロ趣味になっていた。

そして奇妙なのは装飾だけではなく、どうもこの店の空気感が独特で、今自分が何処にいるのか分からなくなるような、軽い目眩にも似た非現実的な感覚を引き起こすのだ。

客層は幅広く、年配の夫婦もいれば若いOLのグループ、大学生風の若い男と様々で、それぞれが静かにこのカフェで過ごす時間を楽しんでいるようだ。

「繁盛してるなあ」

「お陰様でね。いや、女給様かな。和服を自分で着られて見栄えのいい娘を探すのが大変だったよ。あ、でもこの店の女給さんは、昔のカフェーみたいに席でお酌したり、上で客を取ったりしないからな」

「当たり前だよ、そんなの」

俺は出してもらったグラスビールを一口飲み、喉を潤してから小声で聞いてみた。

「お前まだ上の階に住んでるのか？」

「いや、上の階も襖ぶち抜いて座卓置いて客席にしたんだ。人気有るよ、和室は」

「そうか…じゃ、もう出ないの？あの、小鈴さんとか、銀子さんとか？」

龍児はちょっと頭を搔いて、苦笑いして言った。

「いや、居るよ、ずっと。視える人には視えるんじゃないのかな」

「ええ！？お前、怖くないの？」

龍児は俺の方に顔を近づけて、ニヤリと笑う。

「カフェの事だとか昔の流行りモノについて、色々教えてくれるんで助かってるよ。それにな…」

「うん？」

「小鈴はやっぱりいい女なんだよお」

「…お前…」

何が怖いって、幽霊より商魂より、こいつのスケベ心が一番怖い。

螺旋階段

子供の頃、近所にお化け屋敷と呼ばれる、無人の洋館があったんだ。

誰も住まなくなっていて何年経っていたのか分からないが、とにかくお化けが出るという噂があり、怖がりの子供などは、その家の前を通るのさえ嫌がるほどオドロオドロシイ建物だった。

僕が五年生の学校が休みの日の事だ。友達三人と、そのお化け屋敷探検を決行した事がある。

今、思うと大変な事をしたと思うのだが、かなり荒っぽいやり方で、僕らはその家に侵入したのだ。

その家の正面玄関は、ガッチリした木製のドアだったのだが、裏口はごく普通の日本家屋に有りがちな、格子状の木枠にガラスが嵌った引き戸だったので、僕らはガラスを割って引き戸の内側の鍵を開けて、家に入った。もう時効だから言ってしまうけど、立派な器物破損の上に不法侵入。

白くホコリの積もった家の中を、勿論土足で歩き回ったわけだけど、家具は何も無くガランとしていた。広く取った出窓から外を見ると、鬱蒼と緑が茂る中庭が見えたのを覚えている。

部屋から部屋と次々探検していたら、一緒に行った友達の一人が、急にオシッコしたいなんて言い出すから、トイレ探して行って来いって言ったんだけど、それは怖くて嫌だけど、漏れそうって言うからさ、仕方無くそいつは玄関で立ちションしていた。最低ですね。

その家は、部屋と部屋を結ぶ中央に、大きな螺旋階段があった。そんな形の階段、見たことが無かったので、僕らは興奮して登ったんだ。二階に上がる途中の踊り場に窓があり、そこから外を見ると、さっき見た中庭を上から見る事になった。ジャングルの様になった庭の真ん中に、小さな噴水のような丸い水盤があった。

そこから又、上に上がると、又踊り場に窓があった。

外を見ると、中庭を俯瞰して見る事になり、建物の全体像も何となく分かった。ジャングルの周りの床には、きれいなモザイクタイルが敷き詰められていた。

階段はずっと上まで続いているので、さらに上に登ろうとすると、友達の一人が僕のシャツの裾を、そっと引っ張った。振り向くと、その子の顔は青ざめ、怯えているのが分かる。

「何？どうしたの？」

「変だよ。ここ、二階までしかないはずだよ」

僕は、ハッとして上を見た。二階どころか、十階くらいは有りそうなほど階段が続いている。

わあっ！と、皆んな叫ぶと、転げるように階段を走り降りた。オシッコしていた子も、一階で僕らに合流し、慌てて逃げた。

一度、近所の公園まで皆んなで逃げ、それから各々、興奮して家に帰った。

次の日、僕らの冒険をクラスの友達に話そうと、息巻いて登校したら、授業の前に放送朝礼とかいうのが有り、校長先生曰く。

「近所の空き家に侵入した小学生がいます、ご近所の方から通報がありました。そういう事をする子が、この学校にいるとは思いませんが、皆さんは絶対にそんな事をしないように気をつけて下さい」

そんなこんなで、この冒険は、僕ら四人の永遠の秘密になった。

数年後、その建物は撤去されて駐車場に変わり、あの螺旋階段も永遠の謎ってわけ。

「何処にも無い国の物語」 時の章 第三話

鮎子

時代が昭和から平成に変わる頃、仕事で山間の小さな村に数日泊まった事がある。

村には旅館やホテルといった専門の宿泊施設など無く、釣具屋兼食堂の二階の六畳間を一部屋借りて過ごした。

仕事が終わった後、温泉掛け流しの銭湯で汗を流し、宿泊先の食堂で川魚の焼いたのをつつきながら晩酌をするのが楽しみだった。

季節は桜が終わって、新緑が鮮やかになる頃ではあったが、山の中は街より気温が低く、飲むのはいつも熱燗だった。

その日の晩、食堂には自分の他に、近くの川に遊びに来ている釣り客が一人と、地元の労働者が一人いただろうか。

自分はいつも通り、川魚と山菜をつまみに一人晩酌をしていた。

風が強い晩で、ゴウと唸りを立てるたびに、古い木造の食堂はミシミシと捻じれるような音を立て、私は身を竦ませた。

店主の老夫婦は、もう客が来ないと踏んだのか、厨房の奥の自室に入ってテレビを見ているようだった。

私が、何かご飯物を頼もうかどうしようかと考えていると、ガタガタと玄関の引き戸が開いて、着物を着た若い娘が一人入ってきた。風が吹きこんで、すーっと食堂の空気が寒くなる。

こんな所で、こんな時期に着物で出歩く女なんて珍しいな、と思いながらその娘を見ていると、あちらも私の方を見たので、目が合ってしまった。二十歳を少し出たくらいの年頃で、一本に三つ編みにした黒髪を、頭の後ろでクルリと丸くまとめ、簪で留めている。軽く化粧はしているものの、まだ幼さの残る可愛らしい顔をしていた。

着ているものは黒い幅広の襟の付いた紺地に縞の入った着物で、黒地に花の刺繍の入った帯を締めている。羽織りでも有れば良いのにと私が思うほど、寒そうに手を袖の中に引っ込め、体を小さくするようにして私を見ていたが、驚いた事に彼女は真っ直ぐ私のテーブルに近づいて来た。

「お客さん、ここに泊まってる人？」

何の屈託も無い、子供のように無邪気な問いかけだった。

「そうだけど」

「そうなの。オバサン達、中でご飯食べてるのね」

「この女将さんかい？うん、奥にいるよ」

「ふうん」

そう言うと彼女は私の向かいの椅子に座ってしまった。私が当惑していると、彼女は歳の割には世慣れた様子で、私の空いた杯にとっくりから酒をついでくれたのだ。

「相席させて下さいな。あたし、一人でご飯食べるの苦手なんです」

彼女とは逆で、歳の割に世慣れていない私は、何と言って良いか分からず、ポカンとして彼女の顔を見詰めていると、娘はフッと吹き出して笑った。

「そんなに驚かないで下さい。あたし、この先のお店で働いているんです。今日は暇だからお休み。鮎子って言います」

私は、この先のお店ってどこの店だろうと思ったが、若い娘の身辺についてあれこれ詮索するのもはばかられ、ああそうか、とただ生返事をするしか出来なかった。

「僕がおばさん呼んでこようか？君、晩御飯食べるんだろ」

決まりが悪くなって、私が腰を浮かしかけると、鮎子は私の袖を引っ張って座らせた。

「ねえ、お客さん。あたし、宴会の座を取り持つ芸をするのよ。ここで見せてあげるから、気に入ってくれたら晩御飯ご馳走してくれる？」

ああ、この娘は芸妓なのか、と思ったが、私はお座敷遊びなどした事がないので、ここで見せると言われても、彼女が何をするのか見当が付かなかった。

「見せるって踊りか何かかい？」

「踊りも唄も、色々よ。とっても綺麗で楽しいのよ」

目を輝かせて、いかにも楽しそうに言う鮎子の提案を断るのは何だか気の毒だったし、私も次第に彼女に興味を湧いてきた。座敷を借りるのは無理だが、この夕食を奢るくらいなら薄給の自分にも大した出費ではないだろうと思い、私は彼女の芸を見せて貰うことにした。

「いいのね？それじゃ、その杯の中を覗いて下さいな」

嬉しそうな鮎子に言われるまま、先ほどついでくれた酒の入った杯を上から見つめる。酒は杯の縁まで、こぼれそうなくらいなみなみと満ちていた。

「酒しか見えないがな」

「ちょっと暗くすると見えるのよ」

そう言いながら、杯の上に蛍光灯の明かりが入らないように、鮎子は自分の袂を私の顔の横に持ってきて、杯の上を暗くした。これは一体、何の芸なんだろうと訝しく思いながらも、鮎子の手元から香る甘い花にも似た匂いに幻惑され、私は目を細めて杯の中を見つめ続けた。段々見えてきたのは、白い天井と黒縁の眼鏡を掛けた自分の顔という、モノトーンの像だった。

「どう？何か見えますか？」

「僕の顔が映ってる」

「それじゃ、もう少しね」

手品でも見せられるのか、それとも冗談なのかと不審に思い出した頃、ふいに酒の表面が緩やかに波打ち、赤い点がチラチラしだした。

目を凝らして見つめると、その赤い点は無数に並ぶ赤い提灯となり、それがはっきり見え始めた途端、夕闇に紅灯ゆらめく花街を散策する人々の背中や料亭の黒い瓦屋根、窓越しに垣間見える明るい座敷などの像が、まるでスライドのように次々現れては消えた。

直径数センチの杯という小さなスクリーンは、突然私を呑み込むほどの大きさに広がり、私の目の前で、一人の着飾った芸妓が手に扇子を持ち、優雅に舞っていた。

まだ幼い半玉が、小さな手で一生懸命鼓を叩いて調子を合わせている。脇に控える大年増は、三味線と唄が巧みだ。

私は目の前に繰り広げられている艶やかで浮かれた世界に圧倒され、うっとりを見入ってしまった。

裾模様の入った黒い着物を粹に着こなし、金糸銀糸で刺繍された、華やかな帯を締めた白塗りの芸妓はまだ若く、目鼻立ちのはっきりした美人だった。

ひとしきり踊ると、彼女は優雅な所作で裾と袂を整えて畳に正座し、三つ指をついて深々と私に向かって頭を下げた。

「ああ、綺麗だった。素晴らしいね」

私は感激し、思わず彼女に向かって大きな拍手を送った。

突然私は自分の拍手の音で我に返った。

杯の中に揺れているのは、俯いている私の顔だけであった。

慌てて鮎子の方を見ると、そこには誰もおらず、なぜかテーブルの上には空の皿やどんぶり、小鉢などが並んでいた。

驚いて周りを見回すと、他の客は既に帰ったのか、食堂に座っているのは私一人だ。

僅か数分、杯を覗いていたと思ったのに、時間は小一時間ほど過ぎていたのだ。

呆然としていると、厨房の奥から店の老婆がヨロヨロと出てきた。

「お客さん、もう片付けてもいいですかね？」

「ああ、もういいよ…。あの、変なことを聞きますが、ここに並んでいる皿やなんかの料理は、僕が頼んだんですかね？」

「へえ…？。そりゃ勿論、お客さんが頼んだですよ。おや、きれいに食べなさって」

ニコニコして食器を下げる老婆に、私はもう一つ質問をした。

「この辺に、芸妓を呼べるような店はあるのかな？」

「はあ、芸妓さんですかあ？今はもうございませんなあ。戦前でしたらなあ、この辺りにも小さいながら温泉街があったんで、置屋さんや待合もありましたが、もうそういう時代じゃございせんから」

「そうでしょうねえ…。いや、どうもご馳走さま」

私が財布から金を出して会計を頼むと、老婆は前掛けの中から小銭を出してつり銭をくれた。

「そうそう、こんな店でもねえ、その時代にはお座敷に芸妓さんと呼んだりしたそうですよ。姑から聞いたことがありますわ」

「お座敷って、上の僕が泊まってる部屋かい？」

「まあ、七十年前まではこの店も小料理屋だったんで、それなりに華やかだったそうですよ」

老婆はホッホッと小柄な丸い体を揺すって笑った。

私は部屋に戻って着替え、薄っぺらい布団に潜って考えた。

暗闇の中で狭い六畳間を見回すと、確かに古いながらも床の間と違い棚をしつらえた、今時ではなかなか見られない純粋な和室なの分った。

かつては様々な男達が、ここで芸妓と差しつ差されつ、浮かれた一時を楽しんでいたとは正に夢のようだ。

「どうせなら、定食だけではなく一杯飲んでいけば良かったのになぁ…」

あの娘が一体何だったのかは分からないが、僅かな玉代で良いものを見せてくれた鮎子に感謝こそすれ、怖いなどという気持ちは微塵も起こらなかった。

その後、二度と鮎子は店に現れず、私もまたその村を再び訪ねることはなかった。

僕にはあまり歳の離れていない若い叔父がいた。

母の一番下の弟で、僕より九つ年上だった。都会に住み、身体が弱く友達の少ない子供だった僕には、夏休みや冬休みになると、母を慕って暫くの間滞在する叔父は、田舎の面白い話を聞かせて一緒に遊んでくれる、良き兄のような存在だった。母にとっても、十七歳の時に生まれた末の弟はとても可愛かったようで、叔父が遊びに来た時は、まるで息子が一人増えたかのようにかいがいしく世話をしていたのを、良く覚えている。

ある夏の日、その叔父は、僕はイツキ兄ちゃんと呼んでいたが、八歳になる僕を連れて電車に乗り、近郊の海岸まで連れて行ってくれた。両親は小さな電気工事店を営んでいた為、子供が夏休みだからといっても、なかなか家を離れられなかったのが、イツキお兄ちゃんが気を利かせてくれたのだと思う。実は、この時まで僕は海で遊んだことがなかったので、電車に乗っている時から、熱が出そうなくらい嬉しくて興奮していた。両親に海に入るのを禁じられていた僕達は、普段着のまま海岸で遊ぶことしか出来なかったが、それでもこの時の海の印象を、僕は二十年以上経った今でもはっきりと思い出せる。

空は濃く青く、入道雲は巨人のごとくモクモクと逞しく立ち上がり、青に灰色を一刷毛はいた海原はキラキラと輝き、打ち寄せる泡だった波は僕の裸足の足元の砂をえぐり、くすぐったくておかしかった。僕は照りつける日差しがジリジリと肌を焦がすのを、あの時ほど面白く感じた事はなかった。

イツキ兄ちゃんは、ジーンズの裾を捲り上げて波を蹴るように、波打ち際を走っていた。キャップのひさしが濃い影を作り目元を隠しているが、陽に焼けた頬に汗が滴り、大きな口を開けて笑っている。海の水も顔に流れる汗も、しょっぱくてベタベタしていたが、何もかも面白く楽しかった。

イツキ兄ちゃんは、僕を岩場に連れて行ってきて、岩と岩の隙間に溜まった水の中に、沢山の小魚や小さな蟹が住んでいる事を教えてくれた。僕はその温まった水の中にうごめく、無数の生き物の影を認めて、飽かずに見入っていたものだ。しゃがみ込んでその水溜まりを見つめていた時、突然キラキラと輝いていた水の表面が暗く濁り、質の悪い鏡のように僕の黒っぽい姿を映した。

空を見上げると、太陽は雲に隠れ、山の片側から濃いねずみ色の分厚い雨雲がグングンとこちらに近づいて来るのが見えた。イツキ兄ちゃんもキャップのひさしを上げて雲を見つめ、ちょっと唇を突き出して不満な顔をした。

「ジン、雨が振りそうだから帰ろう」

「ええ？ もう帰っちゃうん？　そこで休んでるうちに晴れない？」

僕は目で、砂浜に店を出しているバラックのような飲食店を指し示したが、イツキ兄ちゃんは首を横に振った。

「アレは雷雲だから、ここにいない方がいいんだ。それに急に天気が変わると、電車が混雑して座れなくなるぞ」

僕はそれを聞くと、大人しくイツキ兄ちゃんに従って帰り支度を始めた。電車でずっと立っているのは身体がしんどくて嫌なのだ。母が手作りした小さな布製のリュックを背負い、イツキ兄ちゃんが手渡してくれた水筒の冷たい麦茶を飲みながら歩き出すと、海風が湿っぽく冷たくなってくるのを感じた。

「ジン、急ごう」

イツキ兄ちゃんが僕の手を取って駅まで急ぐと、駅舎に着いた途端にバラバラと大粒の雨が降り出し、稲妻が閃き雷鳴が轟いた。それから、まさに滝のような雨が降り出し、水煙の立つ地面を、あんぐり口を開けて眺めていると、若い駅員が窓口から顔を出して、キミたち間一髪だったねー、と笑い掛けた。イツキ兄ちゃんがニヤリと笑いながら、シャツの袖で顔の汗を拭い、僕も真似をしてシャツの裾で顔を拭いた。

電車に乗り、向かいあわせでシートに腰掛けて窓の外を見ると、空の半分はどす黒い雲に覆われて大雨が降っているのに、残りの半分にはきれいな青空が覗いていた。

「イツキ兄ちゃん、あっちは晴れてるね」

「うん、面白いな。ほら、こっちの黒い雲の中では稲妻が光ってる」

イツキ兄ちゃんの言うとおりの、その分厚い綿のような暗い雲は、時折その中に青い電球や赤い電球でも仕込んであるかのように、ぱっと輝いた。それは恐ろしくもあったが、ずっと見つめていたいと思う魅力もあった。

「こういう雨が晴れた後は、虹が出ることが多いんだぞ」

「僕、虹なら何回か見たことあるよ。学校帰りにも見たことあるよ」

イツキ兄ちゃんはキャップを取り、汗で濡れた髪をタオルで拭きながら、ちょっとからかうような口調で言った。

「都会っ子は可哀相だよな。お前は虹の根元を見たことないだろう？」

「虹の根元？」

僕のイメージする虹と言え、空の高い所に淡い弧を描くカラフルな色の帯であって、その低い所に何かあるかなど考えた事もなかった。

「虹にはな、根っこがあるんだ。田舎にいれば見られるのになあ」

「嘘だよ。虹って浮いてるもん、根っこなんてないもん」

子供ながら、それは何だか科学的ではないと思った僕は、イツキ兄ちゃんに反論したが、それでも虹の根っこが、もしあるのならば、やっぱりそれは見てみたい。

「……虹の根っこって、どうなってるの？」

「それはな……。」

イツキ兄ちゃんは笑いを噛み殺しながら話した。

「……虹の根っこは、フッ……七色の半透明な象の、せ、背中……ククッ、背中から生えてる！」

「ウソツキ！」

「あはははは、は一、それは嘘だ、あー可笑しい。あははは」

目に涙を浮かべて笑っているイツキ兄ちゃんを、僕は冷めた目で見ながら呆れて言った。

「やっぱり、嘘だ。虹に根っこなんてないんだ」

「はは、でも虹の根元は見たことがあるよ」

「嘘だよ」

「嘘じゃないって。街の中じゃ無理だけど、ほら、ここみたいにな」

そう言って窓の外に広がる景色を指さす。

「海に虹が立った時には見られるんだ。まあ運が良ければだけど」

真顔で言うイツキ兄ちゃん言葉に、僕はまたもや惹きつけられた。

「どんな風に見えるの？」

「それはな……。あー、そうかあ、こんな風になってるんだー、ははあ、なるほどなーって感じだ」

「わっかんないよーっ！」

焦れて癩癩を起こしそうになる僕の、汗でべとつく額を、イツキ兄ちゃんは乱暴にタオルで拭いて笑った。

「そういうのは、自分の目で見てこそなんだよ。先にオチを知ってから見ても面白くないだろ？ いつか見られるといいな」

結局イツキ兄ちゃんは、虹の根元がどんななのかは教えてくれず、僕はその夏中を悶々として過ごしたのだが、イツキ兄ちゃんと会ったのは、この夏が最後になってしまった。

彼はこの年の冬、歩いて学校から帰る途中、居眠り運転の車に突っ込まれてあっけなく命を落とした。

祖母と母の嘆きようは凄まじく、まるで狂ったように身を折って泣き続け、僕もまた二三日熱が出て寝込んでしまったほどショックだった。

時が流れ、年に一二度実家に帰った時に見る、母のタンスの上に飾られている樹叔父の写真は、汗で濡れた髪を立ち上げて破顔している、陽に焼けた十代の細っこい少年のままで色褪せていた。

僕が二十年以上経って、今更こんな事を思い出しているのは、先日出張で遠出をしたせいなのだ。

平日の昼下がり、ローカル線の海沿いの町を目指して、ガラガラの普通列車に乗っていた時、空は生憎の雨模様で、海面は雨に打たれ毛羽立ちながら灰色に蠢いていた。ここの線路は、ちょっと怖いぐらいに海岸沿いの崖っぷちに敷かれているので、シートに深く座っていると、まるで海面下に座っているような錯覚を覚えるほど海に近い。

昔、イツキ兄ちゃんとかんな風に電車に乗ったことがあったなあと懐かしく思っていると、雨は次第に小降りになり、光の筋が数本、雲間から海面に向かってその足を下ろした。

にわか雨だったのか、雨雲の足が早かったのか、しばらくすると空は青く晴れ上がり、そこにくっきりと濃い大きな虹が姿を現したのだ。

――海面から虹が立ち上がっている！

僕は慌てて、やけにロックの固い窓を力まかせに全開にすると、外へと顔を突き出した。

どっと吹き込む強い海風に目を細め、視界を邪魔する前髪を抑えて目を凝らすと、確かにその大きくはっきりとした虹は、間近の海面から立ち上がっていた。

電車はカーブを切って、どんどん虹から離れて行く。

「あーはっはっはあ、そうかあ、これが虹の根元かー、ははあ、こんな風になってるんだー、はははは」
僕は塩辛い風にむせながら大いに笑った。

イツキ兄ちゃん、確かにオチを知らずに見た方が面白いもんだったよ。



第一話 魔女の家

第二話 帰郷

第三話 顔

第四話 霧笛

第五話 幸福の指環

魔女の家に行く道は無いよ。

道が無いから灯りも無いよ。

行きたいのなら、地面に足を着けず
風に乗って闇の中に行くしかないのさ。

魔女から貰いたいものが、呪であれ祝であれ

行くのなら覚悟が必要さ。

時には呪より祝の方が

恐ろしく長く人を縛るって事も

覚えておいた方がいいよ。

そっちの方が残酷かもよ。

貴方。

そう、貴方に言っている。

忘れないでね、この事。

最近は「孤族」という言葉が流行りらしく、独身で兄妹もおらず、故郷を離れて一人暮らしの長い私にとっても他人事ではないな、とテレビの特集番組を見ながら考えていた。

そんな時、同じような身の上の学生時代の友人から、ある日珍しくメールが来た。

<故郷に帰る事にした。ついては家具や本など、欲しいものがあったら取りに来ないか？何でも持って行っていいぞ。いつでもいいから都合の良い時にでも寄ってくれ>

ああ、あいつ、とうとう引き上げるのかと思いながら、休みにでも行くよ、と返信した。ちょっとした違和感を感じながら。

休日に、あいつの部屋に行こうと電話したが出なかった。そう遠くでもないのに、いなくてもいいやくらいの気持ちで、住んでいるアパートまで行ってみたところ、部屋のドアチャイムを鳴らしても誰も出ない。

何気なくドアノブを回すと、鍵がかかっておらず簡単にドアが開いた。無用心だと思いながら、おーい、来たぞ、と声を掛け家に上がってみたが、やはり誰もいない。人の居た気配すら感じられない。

2 LDK の居間を突っ切って、寝室へ入ってみたが、ベッドは最近使われた形跡が無かった。嫌な考えが頭をよぎる。

何時からいないんだ…。

パソコンを置いてある机の上に、ミニチュアの家が置いてあるのに気が付いた。陶器製でピンクの壁に青いトタン屋根、今時珍しい煉瓦の集合煙突が印象的だ。

そこで、ハッとした。

これは、あいつの実家のミニチュアなんだ。

そうして思い出した。故郷にあいつの両親は既に亡く、集合煙突のついた小さな古家は、かなり前に処分して今は無いと聞いた事を。

しばらくの間、その部屋であいつの戻るのを待ったが、一向に誰も現れず、日が暮れてきたので帰る事にした。その家のミニチュアと、二三冊の本をコートのポケットにねじ込んで。

それ以後、あいつの消息は知れない。

俺は子供の頃から色々見える体質なのだが、慣れてしまったせいか性格か、見える物が怖いと思った事はない。見えるってのは、この世の物ではない何かの事だ。

怖くはないが、関わり合いになるとメンドクサイので、大抵は見て見ぬ振りをしている。だから幽霊屋敷探検なんてした事はない。そういう物を好き好んで探りたがるオカルト好きと付き合うのもイヤだが、自分の理解出来ないものを矢鱈と怖がってキャーキャー騒ぐ連中も好きじゃない。

俺の友達の中で一人、面白い奴がいた。研究家体質で実証主義な奴だ。

深夜、飲んだ帰り道のこと、二人で俺のアパートに行く途中の緩やかな坂を上っていた時、右手の古い石垣の石の一つに、ぽっかりと男の顔が浮かんでいた。

俺が、ああ、顔が見えるな、と酔った頭で考えていると、その友達も暗がりで見つめていた。ははあ、こいつも見えるくちか、と気が付いたわけだ。

「お前も、あそこに男の顔が見えるのか？」と聞くと、むっとした顔をした。

「ただの模様だ」

大威張りで言いやがる。

「そうか？俺にははっきり顔が見えるんだけどなあ。あれはオバケじゃないのかな」

普段は無視するところだが、そいつの態度が可笑しいのと酒のせいで、俺はちょっと面白くなり、その顔の浮いている石に寄っていった。五十がらみの痩せたおっさんが、何だか切なそうな顔をしてこっちを見ているぞ。

友達は、ズボンのポケットに両手を突っ込んだままにじり寄り、石に顔をくっつけるようにしてシゲシゲ見だした。

俺が石垣にもたれてその様子を見ていたら、あいつ、いきなり石を撫で回し出し、男の鼻や耳を引っ張り、目潰しをかまし、しまいには唾を付けて石を擦り出したじゃないか。ただでさえ切なそうな顔のおっさんは、段々泣き顔になった。

友人は、さんざん石の表面を捏ねくり回した挙句、俺に向き直って一言こう言い放った。

「目の錯覚だ」

俺は酔いも手伝い、腹を抱えて大笑いしてしまった。

無然としている友人の後ろで、迷惑顔のおっさんは、スーッと消えてしまったけどね。

久しぶりに友人と酒を飲んで盛り上がり、終電に乗り遅れてしまった。

友人は気ままな一人暮らしなので、彼の部屋に一晩泊めてくれると言う。古くて汚いけどと言われた木造モルタル建てのそのアパートは、確かに古くくたびれてはいたが、彼の部屋は物が少ないせいか割と片付いていて、若い男の一人暮らしにしては小ぎれいな方だった。

「寝袋しかないんだけど、いいかなあ？」

「ああ、いい、いい。もう、そんなに寒くないしゴロ寝でもいいくらい」

友人は、登山の時に使うシュラフを押入れから出して、ベッドの下に置いてくれた。二人ともすっかり酔っていたので、それぞれの寝床に潜り込むと、灯りを消してすぐに寝てしまった。

どれくらい経ったろうか、何かの音が耳に響いて目が覚めた。暗闇の中で目を瞑ったまま耳を澄ますと、ポーッと霧笛のような音が聞こえる。ああ船か、とぼんやりした頭で考えていたが、おかしな事に気づいてスッと眠気が飛んだ。ここはゴミゴミした市街地のど真ん中で、近くには海も無ければ河も無いのだ。霧笛など聞こえるわけが無い。体を起こして、もう一度耳を澄ますと、またどこからかポッポーッと音が響いた。けっこうなボリュームだ。

おかしいなあ、何の音だろうと考えていると、ベッドに寝ていた友人がこちらに寝返りを打った。

「音だろ？気にすんな…」

目を瞑ったまま、そう呟いた。

「あれ何？霧笛みたいだけど」

「うん、そう…。多分、霧笛」半分眠ったまま答える。

「でも、この辺りには海も河も無いだろう？」

友人は面倒くさそうに目をこすりながら俺の方を見た。

「海は無いけどな、昔はこの辺りは河があったらしいよ。運河だったそうだが、全部埋め立てられて、今は何の痕跡も無いけど…」

「それなら、あれは何だよ？」

「さあなあ…。俺は船の幽霊かなって思ってるけど、ただの音だから気にするな」

それだけ言うと、友人はまた向こうを向いて寝入ってしまった。

「船の幽霊って…幽霊船じゃなくって、霧笛が…？」

霧笛はその後も何回か響いたが、その度に音は小さく遠くなり、いつしか聞こえなくなった。見えない船は、何処かから何処かに向かって、今も繰り返して旅を続けているのだろうか。

音だけの船の幽霊は、特に怖いこともなく、ただ少し寂しげだった。

「何処にも無い国の物語」 闇の章 第四話

幸福の指環

結婚が決まった時、どこから噂を聞いたのか少しの間だけお付き合いのあった男性から馴染みの喫茶店に呼び出された。

彼は以前よりやつれ、ふわふわした浮世離れした表情で「お祝いを渡したかった」と私に黒い小箱をくれた。そして弱々しく笑うと、またふわふわと漂うように席を立った。

あっけにと取られてドアを出てゆく彼の後ろ姿を見送っていたが、気を取り直して黒塗りの小箱を開けてみると、黒ビロードの上に丸い輝石が二つ付いた銀の指環が納められていた。

石の一つは絹の様な純白の真珠で、もう一つは柘榴色の赤い珠である。

どうして結婚する私に指環なんてくれるのだろうと少々嫌な気持ちになったが、指環自体は可憐で可愛らしかった。

その銀色の指環をそっとつまみ上げると、コロリと柘榴色の珠が転がって、手の平に落ちた。

「何これ？嵌ってないんじゃないの？乗せてるだけ？」

柘榴色の球を元の位置に置くと、今度は真珠の方がコロリと落ちた。真珠を据え直すと柘榴色の方が落ちる。

「どうなってるの？最初は二つ並んで付いてたのに、どうして？」

どういうわけか石の一つを指環に据えると、もう一つが落ちてしまうのである。

途方に暮れて指環の入っていた小箱の中を見ると、底に小さな紙が貼られており、蒼いインクで「幸福の指環」と書かれていた。

気味が悪くなった私は、店のゴミ箱にその指環をケースごと捨てて帰ったのだが、数日後、指環をくれた彼から葉書が届いた。

それにはただ一行だけ、こう書かれていた。

「君は幸福を捨ててしまった」

結婚式当日、純白のドレスを来た私の前に花婿は現れなかった。

私の介添えをしてくれるはずの親友と駆け落ちしてしまったのである。

後から聞いた話だが、彼女の着る予定だったドレスは赤黒い柘榴色だったそうだ。

「何処にも無い国の物語」 闇の章 第五話

この作品はブログ「[白嘘物語](#)」に掲載された掌編小説などをまとめたものです。

尚、ブログは2011年12月に移動しました。

新しいブログはこちらになります「[白嘘物語-つくもうそ物語](#)」

2011年5月26日～2011年10月23日

何処にも無い国の物語

著者： [葉山ユタ](#)

ブログ：「[白嘘物語-つくもうそ物語](#)」

ツイッター：http://twitter.com/#!/Yuta_Hayama

Copyright Yuta Hayama All Rights Reserved